

人生には目的がある	スペンサー・W・キンボール	338
1924年の迫害	トーマス・J・グリフィス	343
質疑応答		345
信仰を擁護して	セオドア・M・バートン	348
歌声は希望の光となって	コーリン・ヘンリックセン	351
日々の恵み	ヘレナ・ハンノネン	353
祖父の勇気	アスメント・ヘルネス	354
主の戒めは祝福をもたらす	ハートマン・レクター・ジュニア	355
あんそく日	スターリング・W・シル	357
小さなお友だちへ	O・レスリ・ストーン	358
こうふくの木	エバ・グレゴリー・デ・ビメンテ	360
おもちゃばこ		363
狼の遠吠え	ウエンデル・J・アシュトン	365
モルモン経は神のみ言葉	エズラ・T・ベンソン	366
モルモニズムの真髄	ハートマン・レクター・ジュニア	369
アメリカにおけるキリスト	N・エルドン・タナー	372
「わたしを主よ、主よ、と呼びながら なぜわたしの言うことを行わないのか」	スペンサー・W・キンボール	375
復活祭に寄せて	マリオン・G・ロムニー	379
ローカル・ニュース		382

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン	ゴードン・B・ヒンクレー
マーク・E・ピーターセン	トーマス・S・モンソン
デルバート・L・ステイプラー	ボイド・K・パッカー
リブランド・リチャーズ	マービン・J・アシュトン
ヒュー・B・ブラウン	ブルース・R・マッコンキー
ハワード・W・ハンター	L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ
(内務伝達部長)
ジョン・E・カー
(配送翻訳部長)
ドイル・L・グリーン
(教会誌編集主幹)
ダニエル・H・ラドロウ
(教会教課企画調整主任)

国際機関誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼 修一

聖徒の道 8月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・
センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間予約1,700円 1部 150円
海外予約2,200円



人生には

大管長 スペンサー・W・キンボール

◇ ◇

「自分が価値ある存在であることを見出すのは容易である。なぜならそうした要素は私たちの中に数多くあるのだから。」

◇ ◇

末日聖徒イエス・キリスト教会が地上における神の王国であることを知っている者、その信仰を持っている者は、家庭でも、ピーハイブのクラスでも、執事定員会や、ヤングアダルトあるいはスペシャルインタレストの評議会であっても、どこでも自分のつとめをさらに立派に果たしたいと思うものである。しかし、神と人のことをないがしろにしては、せつかくの訓練も技術もたいして役には立たない。

「奉仕のしかたを知るのは、実際に奉仕することによってである。」私たちは隣人への奉仕に携わるとき、その行ないによって人を助けるばかりでなく、自分の問題を新たな視点から見つめることになる。人のために励むとき、自分のことを考える時間は少なくなる。奉仕の奇跡のまさしく中樞に、自分を無にすることで自分を発見するというイエスの約束が存在するのである。

私たちは人生の指針をみつけるという意味で自分を発見するだけでなく、適切な方法で隣人によく奉仕すればするほど、心に充実感を覚える。そして人に奉仕するときに、さらに意義ある存在者となるのである。私たちは人に奉仕するときにいっそうたくましくなる。事実、自分が価値ある存在であることを見出すのは容易である。なぜならそうした要素は私たちの中に数多くあるのだから。

ジョージ・マクドナルドは、「人と親しく心を交えるようになるのは、愛されることではなく、愛することによる」

目的がある

と言った。だれしもが愛されなければならないのは当然だが、しかし、健全な人生としっかりした目的意識を持ちたいと思ったら、いつも受けるだけではなく、与えていなければならない。

ときに、環境を変えるのではなく、環境に対する自分の態度を変えることが解決になることがある。また難局が奉仕の機会となることもしばしばである。「自己憐憫には地獄も凍りつく」と言われている。

ある教会幹部はこう述べている。

「注意を怠ると挫折の凍傷に冒されることがある。期待が達せられないという寒さのために、その場で凍えることがある。それを避けるには、ちょうど厳しい寒さのときのように、絶えず働き、絶えず奉仕し、手を差し伸べて、静止が命取りにならないようにしなければならない。」

私たちは、奉仕しようとする相手の人に、神が彼を愛しておられ、彼のことを心にかけ、その必要を心に留めておられることを悟らせる必要がある。アロン神権の年齢の若いジョセフ・スミスに、全人類に対する教えを託そうと現われたもうた父なる神と御子イエス・キリストは、この地球上のだれかにただ当て推量で姿を現わされたのではなかった。主は、周到に計画されたその出来事を、「主なるわれ、この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば、わが僕ジョセフ・スミス（二代目）を呼び天より語りて彼に誠命を下せり」（教義と聖約1：17）と言っておられる。

神は何事をも、その場その場の思いつきではなく、常に愛の深い父として、目的をもって行なわれる。その目的は私たちの知るところであり、私たちもまた人生に目的を持っている。

人の不幸を防ごうとして戒めを与えられた、そのように愛の深い天父は、子供たち一人一人の必要を、決して忘れられないであろう。ウィリアム・ロウは次のように述べた。

「あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている（ルカ12：7）と言われている。それは、何事もそれこそ想像の及ぶ限りの小さなことまで、私たちの身に起こることはすべて偶然ではない、ということではなかろうか。私たちに考えられる限りの小さなことまで神のみ手の下にあると言われているとすれば、誕生の様子や親がだれであるか、また誕生の時、あるいはそのときの環境、事情といった人生の大きな物事もみな永遠の目的や支配や神の摂理によっていることが、もっと容易にわかるのではなかろうか。」

神は私たちを認め、私たちを見守っておられる。しかし、神が私たちの必要に応えられるのは、普通の場合、別の人を通してである。それだからこそ、私たちが神の王国で互

いに奉仕しあうことが大切なのである。教会員は、主の弟子の飛び地とも言うべき信者の社会の中で、お互いの力と支えと指導を必要としている。教義と聖約には、「弱きを助け、垂れたる腕を挙げ、かよわきひざを強く」（教義と聖約81：5）することがいかに大切であるかが記されている。奉仕の行為が、ささやかな励ましやごく日常的な仕事の地味な助けであることは多い。だが、日常的な行為や、小さなしかし思いのこもった行ないから、何と素晴らしい結果が生まれることか。

「世の道と神の道の対照がますますきわまつ状況にあって、教会員の信仰は、前にもまして厳しく試みられるであろう。私たちにできる最も大切なことのひとつは、奉仕することによって自分の証を示すことである。その奉仕は、霊的成長を生み、さらに奉仕の気持を確固たるものとし、戒めを守る能力を高めてくれる。」

25年ほど前に、スティーブン・L・リチャーズ副管長は私たちを奮起させる言葉を語った。

「平凡でありきたりな事柄ではあるが、私は、人生でも劇的で取り組みがいのある大切なことは、この「戒めを守る」ということだと、長い間考えてきた。これによって、自分の存在のすべてが試される。それは同時に英知や知識、性格、そして知恵の表明である。」

霊性には大きな安全が伴う。そして、その霊性は、奉仕なくしては得られないものである。

しかしながら、戒めを守っている人に奉仕するための励みとして必要なことは、新たに靈感や啓示を受けることではなく、むしろすでに知っている事柄をみたまによって呼び覚まさせるという簡単なことである場合が多い。「記憶は靈魂の胃袋」と言われているが、私たちはその胃袋で真理を受け入れ、消化し、栄養とするのである。聖霊は私たちの理解と同様、記憶をも刺激する。従って私たちは、すでに正しいと知っていることは行なわなければならない。

簡単なこと、わかりやすいこと、具体的なことを私たちが末日聖徒がふさわしく生活をして聖霊の感化を受け、常に聖霊を伴侶として導きを得なければならない理由は、ひとつにはそのためである。技術の体得は確かに役立つが、聖霊の導きは、それよりもはるかに大切である。

私たちが良い指導者となるためには、自分を助け、導き教えてくれた人々の持つ特質を折に触れて思い出すことである。自分の人生に最も感化を与えた人を2、3名選ぶでしょう。大事なとき、苦しいときに具体的にその人たちのどんな援助がありがたかったであろうか。しばし考えてみれば、その人は真心からあなたのことを心配し、あなたの

ために時間を取り、あなたにとって必要なことを教えてくれたことがわかるに違いない。今、自分の召しにあってそれと同じ根本的な特質を表わしているかどうか、自分を振り返って見ていただきたい。技術が優れていて特別に大きな影響を受けたからその人のことがいつまでも忘れられない、ということは少ないであろう。自分を愛し、理解してくれた、あるいは時間をとって自分を助けてくれた、または自ら模範となって道を示してくれたという人が、たいがい心に思い出されるのである。それだからこそ、昔私たちが頼りにした人たちと同じことを、今私たちが頼りとしている人々のために行なうことの大切さは、いくら強調しても足りないほどである。

もしも私たちが奉仕の単純な原則と単純な行ないに目を向けるならば、組織に固執する意識が薄れてゆくであろう。過去に、教会の組織の系列が壁となって、思うように個人的な援助のできないことがままあった。組織や個人の名目をさして気にならなくなれば、自分が責任を持つ人への奉仕に関心がもつとくようになることにも、気づくであろう。さらに、組織そのものへの関心が今より薄れ、天父の息子、娘である私たちの本来の真実な姿が浮きばりにされて、人々にも天父の子供だという同じ意識を抱かせようとしている自分を発見することであろう。

それに関連して、私たちは偉大な模範者イエス・キリストを忘れてはならない。イエスはニーファイ人の弟子たちに次のように教えられた。

「されば、汝らの光が輝きて世の中を照らすために、汝らの光を高くかかげよ。汝らが高くかかぐる光とは、すなわちわれなり。とりもなおさず汝らが見るわが行いなり。」
(Ⅲニーファイ18：24)

イエスは続いて、ニーファイ人の群衆を近くに呼んで御自身の復活体を見せたりさわらせたりしたことについても話をされた。神聖さはそれぞれ格段に違うが、熱心な指導者も、イエスがなさったように直接効果的な方法として、自分で奉仕しようとする人々に、イエス・キリストの福音の真実性と力とを「見せたり、触れさせたり」できるのである。

イエスが私たちの掲げようとしている光であることを考えてみるがよい。イエスを思い起こさせるものがどれほど私たちの前に示されていることか。末日聖徒イエス・キリスト教会という名称、聖餐の祝福、バプテスマの祈り、「イエス・キリストのみ名によって」という祈り方。イエスのみ名は非常に神聖なので、み名を使ったり引き合いに出したりするときには慎重でなければならないが、しかし私たちは長兄を偉大な模範として仰ぐべきである。なぜならば、この教会はイエスの教会であり、そのみ名をいただき、その福音を基としているからである。

こうして、私たちは自己本位の世の中から集まり来て、奉仕について語っている。傍観者は、大問題の山積する世

の中で、私たちがそのように単純なことににかかわりあっているのをなぜかと思うかもしれない。だがイエス・キリストの福音のひとつの利点は、自分をはじめこの地上に住む人間に関して正しい見方を教えてくれることにある。それによって私たちは本当に大事なことを知り、あれこれと人の気をひく、さほど重要でないたくさんの物事に心を捕われなくてすむようになるのである。

私たちは、末の日の社会がノアの時代にあったようなしるしを幾つか呈すると聞いている。ノアの時代がどのようであったかを伝える言葉はごくわずかしかないが、民は明らかに神の戒めに不従順で、世は乱れ、社会に暴虐が渦巻いていた。(創世6：11) 暴力と腐敗は通常利己心から生じる。このような時代にあつて、隣人への奉仕に心を向けることは、何とふさわしいことであろう。

今日戒めを守る人々は、ちょうどノアが洪水の来る前に箱舟を造るという、一見奇妙な行為によって世間からつまはじきされたように、世の中から分けへだてされるであろう。私たちが単純で日常的、世間的な奉仕を行なおうと努めるとき、そしてこの時代に神の戒めを守ろうとするとき、必ずや私たちは、ノアとその家族が大洪水の前に受けた、同じあざけりに出会うであろう。

ノアの隣人たちは、ノアの仕事が急を要することをただ理解できなかっただけである。私たちも他の多くの人々に、家族や純潔や伝道という単純な事柄に抱いている私たちの急迫感を理解するよう要求すべきではない。

教会には、結婚を一寸延ばしにする青年が大勢いる。ただぐずぐずしているだけの人も多い。責任のないひとり暮らしの方が気楽だと考える人もある。また思い通りの結婚をしたいと祈るだけで、別にそのための努力をしようとしなくてもいい人もいる、そして、特に結婚するつもりのない「世間の人」の間には、結婚しなければどんなことも楽しめるし、独身生活の方がずっと気楽で責任も少ないと主張する人が、ますます多くなっている。

ここで兄弟たち全員に申し上げたい。結婚は神のみまえに誉れあるものである。私たちは、楽しんだり、物欲や名誉欲を満たしたり、自己本位の生活をして情欲を満たしたりすることを第一主義として地上に置かれたのではない。

主なる造り主はこう言われる。

「日の光栄には三種の天界、すなわち三種の階級あり。而してその最も高きものを得んために、人はこの神権の位(すなわち新しく且つ永遠の結婚誓約を言う)に入らざるべからず。人もし然せずんばそれを得ることを得ず。人は他の天界に入るを得べし。されど、そはすなわちその人の光栄の国の行き止りにして、また殖ゆること能わず。」(教義と聖約131：1-4)

「……汝らもしこの誓約を守らざるときは行き止りとなるべし。何人もすべてこの誓約を拒絶するを得て、而もわが光栄に入るを許さるる者あらざればなり。」(教義と聖約

言い訳や合理化をどれだけしようと、これらの真理が無効になるとは思われない。

結婚には子供が付き物である。主はそのことも明確にしておられる。

妻は「その子孫の殖えて地を充さんため、……人々の霊を生まんがため……かくして御栄は父に在る」ために、夫に与えられている。(教義と聖約132: 63)

このとおり、独身男性はだれひとり正当化をして言いがれすることはできない。

一方、ふさわしく魅力的で教養があり、身じまりもきちんとして実に素晴らしい若い女性が大勢いる。彼女たちに申し上げるのだが、私たちはあなたに望み通りの夫をお世話はできない。これまで機会に恵まれなかった人は、自らを注意深く反省してみる必要がある。自分の習慣、話し方、外見、体重、また風変りな点があったらそれも。一つ一つを取り上げて分析してみなさい。何か努力をして、もっと受け入れられるようになれないだろうか。あなたがその判断をしなければならない。

あなたはおしゃべりの度が過ぎてはいないだろうか。引込み思案ではないだろうか。口数が少なすぎないだろうか。もしそうであったなら、考え方や話し方を修練しなさい。

住んでいる場所が悪くはないだろうか。新しい世界が開ける所に引越しはできないだろうか。

服装があまりに古くさかったり、派手であったり、極端すぎたりしてはいないだろうか。うるさすぎはしないだろうか。話し方や声の調子や話すことが突飛ではないだろうか。けたたましい笑い方ではないだろうか。感情を露骨に表わしすぎないだろうか。何でも度を越してはいないだろうか。わがままではないだろうか。万事に尊大ではないだろうか。あなたは子供を持ちたいと思っているだろうか。夫のために毎日喜んで食事作りをする気持があるだろうか。これまでの友だちも大切に、夫と同じような気づかいが払えるだろうか。

ウィリアム・ジェームズは「私の世代にあって最大の変革は、人間が内的姿勢を変えることで生活の外的様相を変えることができるという発見であった」と述べている。

毎日すらっとした自分の彫像の前に立つことで、背がびんと伸びたせむしの王子の話もある。

変化は、望ましくない習慣が良い習慣に代わることで起きる。あなたは良い思いと良い行ないによって、自分の性格と未来を形成するのである。自己憐憫は最も有害である。あなたは自分を哀れんではないだろうか。

あなたは何をしなければならないだろうか。

身じまいをきちんとし、服装を整えて外側を魅力的にし、心もはつらつとしていて魅力があるだろうか。読書によって心を豊かにしているだろうか。もしそうでないならば、

自分を変えなさい。

愛する兄弟姉妹たち、教会はこのようなことを大切にしている。しかし、たとえ私たちに魔法の杖があり、それをひと振りしてあなた方の問題を好きなように変えることができたとしても、それはあなた方のためにはならない。自分で努力してこそ成長があるのである。

あるひとりの姉妹のことが思い出される。彼女は長老見込みの兄弟と結婚して生活を営んでいた。ところがやがて、幾人かの友だちがいつも夫婦と一緒に教会に出かけたり、聖歌隊で歌ったり、神殿に行ったりして、幸せな充実した生活を送っている様子が気になり始めた。そこで彼女は、「どうしてみんなの御主人のようにして下さらないの」とか、「どうして教会にもっと活発にならないの」と、夫をなじるようになった。

たまたま彼ら夫婦の所属するワード部はうるさいくらいにフェローシップに力を入れていた。そのため、やがてその不活発な夫はその意気を感じて、家族と教会活動に大きな喜びを見出すようになった。ところが、それまであんなにぐちをこぼしていた妻が、今度は夫が熱心になったことを不満に思い、「どうして教会の仕事に時間と力を全部さかなければならないの」とか、「ほかの人のように、私に楽しい思いをさせてくれないの」と文句を言い出した。夫はついに妻のぐちに足を引っ張られて、また不活発な状態に逆戻りしたのである。

外見も心も霊も、そして情熱的にも常に魅力ある者となり、ぜひ適齢の人たちと会える場所に出かけるようにしていただきたい。

あなたの居場所は適当だろうか。かたよってはいないだろうか。ある若い女性が20代のなかばを過ぎてても機会に恵まれなかった。私は彼女に、年かきの女性ばかりの家から独立し、速記の仕事をやめて、大学で同年齢の人たちと交わるように勧めた。それからしばらくして、ある日その大学に出向くと、彼女が髪に明るい色のリボンを結び、にこやかに楽しそうな人柄を見せて、そよ風のようにさっそうと私のところにやってきた。そしてその数カ月後、私は神殿結婚に招待されたのである。いつもそのように都合良く事が運ぶわけではないだろうが、このようなこともあるのである。

恵まれた理想の日が明けるのを待っている間に、私たちには他の人の人生を明るくするためにできる行ないがたくさんある。そしてその行ないは、やがては自分に返ってくるのである。

「神は私たちを認め、私たちを見守っておられる。しかし普通の場合、神は人を通して私たちの必要に応えられる。」

1924年の 迫害

16キロの山道を教会に通ったウェールズの人々

トーマス・J・グリフィス

1924年、私たちはウェールズ、モンマスシャーのアバカーン村に住んでいたが、村で末日聖徒は私たちだけだった。そのためアバカーン支部の会員は私たち一家だけであったが、組織は完全だった。日曜日の朝は日曜学校、夜は聖餐会で、火曜日の夜はM I Aを行っていた。私たちは一緒に歌ったり祈ったりして、家族の間には大きな愛が満ちていた。しかし私たちの活動に愛と一致があったことはサタンの気にさわったらしく、それを邪魔しにかかった。

私たちはまもなく、迫害がどんなものかということを知るようになった。人々は私たちをあざけり、頭に角がないかと、帽子を取られることが何度もあった。しかし私たちはどんなことでも我慢できた。そんなある日、村の若い女性が福音を学び始めた。彼女の父親は村のある大きな教会の指導者で、娘が私たちの教会の家庭集会に来ていることを知るとひどく怒り、私たち家族と教会を中傷しだした。やがて別の人たちからも中傷の声が上がるようになり、グリフィス家はひどい迫害に包まれることになった。

地元の医者までが、30人の娘たちがウェールズからかどわかされて、壁をめぐるしたソルトレークの町に幽閉されていると新聞に書きたてた。そのほかにもモルモン非難の記事が出て、あるときには私たち家族を町から追い出そうと言われたりした。

当時、私たちは村有の家に住んでいたが、ある日村議会から、家で礼拝するのをやめなければ、強制立退きを命じるという通告が来た。そこで父が教会の指導者に助言を求めると、教会からは「われらは、……法律を守り、敬い、支うべきを信ぜ」という信仰簡条12条に従うようにという指示があった。

それで、信仰を培ってくれた素晴らしい集会は中止されることになった。わが家から一番近い支部は、ウェールズの山をいくつか越えて16キロほど行ったバーテグという小さな町にあった。あの最後通告を受けた後のある晩、父は家族全員を呼んで、日曜日に山道を歩いてバーテグへ行けば、集会に出席して聖餐を受けることができるのだがと、話をした。その賛否をみんなに問うと、まだ僅か8歳だったアイバーまで全員が賛成した。そういうわけで私たちの、人生でもめつたにない大冒険が始まったのだった。

ランバック山を登りつめ、ハフォドライニス溪谷へ下り、それからポンチプール山を越えてバーテグに入るのだが、その道々、私たちは歌ったり聖句を暗誦したりした。一度深い霧のために迷ったことがあった。そのときは、父はみんなを集めて小さな輪を作って祈った。父は目的地へ導きたまえと神に願った。するといつもならウェールズの山のあたりを吹く風がそこまで上ってきて霧を晴らし、山が見えるようになった。恐らくたまたまそうなったのだろうが、私はそれが父の祈りの答えだと信じている。

雨降りの日には肌着までびしょぬれになった。そんなときはバーテグの聖徒たちが乾いた服を貸してくれ、ぬれた衣服は火のまわりで干してくれた。借りた服が寸法の合わないこともあり、お互いにおかしな格好を笑い合ったりしたものだ。しかし、そんな不便や苦労も、その日の集会の雰囲気になるとすっかり忘れてしまった。私は父の大好きな聖句を今でもよく覚えている。「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである。」(マタイ18:20) 全くその通りだった。主のみたまが非常に強く働いて、私たちの疲れた体は再新

され、霊は高揚した。

数週が数ヵ月となって、日曜日ごとのバーテグへの旅は続いた。そうしたある日、村議会に1924年4月12日付で一通の手紙が届き、論議を呼んだ。それは神の僕の手になる靈感あふれる書状だった。

「最近貴議会が村民のひとりや二人を相手どり、家庭での礼拝の権利を剥奪したと報じるサウス・ウェールズ・アークス紙の切り抜きが、今私の机上にあります。その独断的行為の理由は、彼がモルモンだからというだけだとのこと。

現在モルモンという言葉は、愛とはおよそ無縁のもので、悪意ある人々にとっては罪の権化でもあるため、貴議会の取られた措置は、その理由からして充分うなずけるものがあります。とりわけそのように信ずる人々にとっては。しかしそれで十分な効果が上がったでしょうか。問題の紳士が今もって家で祈りを捧げていることは御存知でしょうか。『中傷宣伝協会』とやらから、あの措置を講じた当の人物と子女が日夜彼らの神に感謝を捧げていることを知らされてはいないのでしょうか。

なぜ他のキリスト教徒の村議会議員が所有する家ではそのような祈りをしてはならないと、命じられないのですか。他のキリスト教徒が讃美歌を歌い、家族や友人や善なる慈悲の神のみまえで話をするを禁じる権利があなた方にあるのなら、『モルモンである』という理由で、祈りをやめよと命じる権利もありましょう。かくして彼は、最もいつくしまれてきた昔ながらの特権のひとつを剥奪されるのです。何でもすぐまに受ける人々は、彼の生活がいかに正しくともそれにはおかまいなく、彼が何か不都合を起こしたために公益を慮って家での礼拝を禁じたと推測します。2千年の昔、ダニエルに同じような命令を下したメディア人やペルシャ人に良い範があります。あなた方はなぜ子供に祈りを教えることを彼に禁じて、その見事な法令を完成させないのですか。

さらにその措置を裏づけるために、ちょうどテベル川の氾濫が初期のキリスト教徒のせいだとされたように、「2年前30人の乙女がマカンという町からいなくなった。だから、英国のどの町からどんな少女たちがいなくなっても、それはモルモンのせいだ」とする証拠をあげることはできませんか。

また情け容赦のない人々が彼らをどんなに悪く言おうとも、新聞の読者は新聞ならモルモンに対するそれらの嫌疑をすでに調査しているだろうと考えます。もしその調査をせず、調査をしていないということが事実を知るすべての人の目に明らかであったなら、あなた方は中傷の荷担者となります。個人もしくは一団体にそのように不当な審判を下すことは、識者の集まりには似つかわしくありません。私の母が生まれ育った国の人々がそのように偏狭であろうとは、どうしても思えないのです。

— デビッド・O・マッケイ —

村議会はこの書状を棚上げにすることを決めた。しかし時すでに遅く、その内容は地方新聞に掲載されてしまった。父は英国在郷軍人会婦人連盟の招待を受けてある会合で話をした。それから何年も経つというのに、その晩父が婦人たちを前にして話したときのことを思い出すと、いまだに心が躍る。父は教会に改宗した願末と、家族に加えられた迫害の話をした。そして、少年ジョセフ・スミスと彼が見た示現、彼が死をもって証を結び固めたことを話した。それから、イエス・キリストの神性を熱心に証した。

その場に出席した婦人たちの目には涙があふれ、父が話を終えても拍手さえせずただ静まりかえって、自分の村で起きたその出来事を恥じているようだった。そのことを、私はよく覚えている。

父が腰を下ろすと、議長が立ち上がって、グリフィス家に家で礼拝する許可を与えるよう、婦人連盟で村議会にかけあってはどうかという動議を出した。動議は満場一致で可決された。それから1週間少しして、村議会から父あてに、議会で十分に検討した結果、家での集会を再開してよいことになったという通知が届いた。

娘に教会の集会への出席を禁じていたあの父親は、いまだに私たち家族とひと悶着起こそうとしていたが、あるとき奇妙なことが起きた。私の父がある晩彼の家へ行くと、玄関の扉のところで彼に出くわした。父は彼の名を呼んで「私たち家族に対する迫害をおやめにならないと神は、必ずやあなたを辱められます」と言った。ところがそれから数ヵ月の間に、彼の鼻を折る出来事が実際に次々と起きたのだ。長女が家出して村の大酒飲みと結婚し、長男は炭坑で大けがをし、末の息子は不治の病に冒された。そしてついに、忘れることのできない晩がやってきて、わが家の玄関でノックの音がした。父が出てみると、そこには私たちを迫害し続けたあの父親が立っていた。彼はうなだれて、こみあげる思いに声を震わせながらひと言、「グリフィスさん、赦していただきにありがとうございました」と言った。

彼の娘はやがてバプテスマを受けてユタに移住した。そして立派な男性に出会い、神殿で結婚し、幸せな家庭を築いた。彼女はすでに故人となったが、末日聖徒イエス・キリスト教会にだけ見られる勇気と信念の遺産を子供たちに残している。

私たち家族は、イエスが「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」(マタイ5:10)と言われた言葉の意味を、今さらながら知った。ウェールズのあの小さな村は、私たちのささやかな天国だったのである。

(トーマス・J・グリフィスは、アメリカンフォーク・ユタ・ノースステーク部のアメリカンフォーク第8ワード部で日曜学校の教師をしている。)

質問

出エジプト記28章に出てくる胸当てがどのようなものか、ユダヤの伝承や歴史からわかりませんか。

答え

ビクター・L・ラドロ

ブリガム・ヤング大学
古代聖典学助教授

裁きの胸当てとそれにつけられたウリムとトンミム（トミム）は非常に神聖なものであったため、ユダヤの伝承では、裁きと決断を下すときに身につけたと言われているだけで、どのような外観を呈していたのかははっきりしていません。しかし、中世の偉大なユダヤ人哲学者であった、ユダヤ教法典学者のマイモニデスの言葉と、若干のユダヤ教法典とから、胸当ての外観がいくらか明らかになっています。

伝承によると、胸当てには、イスラエルの12の部族の名がそれぞれひとつずつ刻まれた12個の宝石がついていました。そしてそれぞれの宝石は正方形で、金の台が付いており、28本の糸で巧みに編んだ編細工の中にはめこまれました。1本の金糸を6本の青糸と撚り合わせて、1本の太い糸を作ります。そして、別の1本の金糸を6本の紫糸と撚り合わせて1本の太い糸を作ります。また、緋糸と亜麻の撚糸についても同様に、それぞれ1本の金糸と撚って太い糸を作ります。それから、これら4種類の糸を織って、幅が1指、長さが2指の織り物を作ります。ここでいう1指とは、親指と小指とを張った長さです。この織り物はふたつに折ると、長さと幅が共に1指の正方形の袋状になります。*さらに金の宝石台を4列、その表面に取り付け、またウリム

とトンミムはその織り物の袋の中に入れました。

こうして作られた胸当ての四隅には金の環が付いていました。上部の2個の環は、エポデ（衣の上に着用した長上衣）の肩についている同じような金の環に純金の鎖で取り付けられました。また下部の2個の環は、腰のあたりで、青いリボンによってエポデの金の環につながれていました。

大祭司は務めに携わるときに、この胸当てとその他の神権の衣を身につけました。そしてこの胸当ては、末日聖徒がよく知っているように、ウリムとトンミムとひとつになって、ある大切な役割を果たしていたのです。王やサンヒドリンの長、あるいはその他一般に認められた者は何か特別な問題に出くわしたら、大祭司のもとへ行きました。すると大祭司は胸当てを付け、刻まれているどの文字が最も輝きを放っているかを見ます。そしてこれらの文字から答えを組み立てて解決を与えたのでした。例えば、ダビデが主に、サウルの追跡が続くかどうか尋ねたとき、大祭司のアビヤタルは3つの文字が輝いたのを目にしました。ユダの名前のYod、ルベンの名前のResh、ダンの名前のDalethが輝きを放ち、YEREDすなわち「彼は下って来る」と答えがあったのです。

ユダヤの伝承によると、ウリムとトンミムは最初の神殿が破壊されて、ユダヤ人が捕われて行ったとき以来失われてしまったと言われています。

それから幾世紀も経ち、ユダヤ人がヨーロッパ各地に散在して住むようになると、方々のユダヤ人の社会では胸当てが作られ、ユダヤ会堂のトーラーの炉だなにそれが飾られるようになりまし。これらの胸当ては大祭司のそれに似ており、12個の宝石の模造品がついているものもあります。しかし、昔イスラエルが所有していた胸当て、ウリムとトンミムは現在ありません。

*訳者注：末日の聖典では「ウリムとトミム」として使用されているが、この記事では旧約聖書にならい、「ウリムとトンミム」とした。

質問

なぜエリヤは生きながらにして天に取り上げられる必要があったのでしょうか。ほかにも死を味わうことのなかった人がいますか。モーセは死なずに身を変えられたと考えてよいでしょうか。

答え

アルマ・P・バートン

ブリガム・ヤング大学
教会歴史・教義学教授

エリヤ（エライジャ）とモーセは、キリストが死に身を委ね、復活される前に、この世に関連のある儀式を施すよう予任されていました。ですから、普通の間人として寿命を越えて肉体を保ち続けることが必要でした。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、このことについて次のように書いています。

「モーセとエリヤ（エライジャ）がかの山で救い主のもとを訪れ、ペテロとヤコブとヨハネに姿を現わしたが、一体それは何のためだったのだろうか。これら3人の使徒を励ますために、霊の姿で現われたのだろうか。彼らは、この世で業に携わっておられる神の御子に慰めを与え、十字架の刑に備えさせるためだけに訪れたのだろうか。その答えは否である。それが目的ではなかった……予言者ジョセフ・スミスは、次のように説明している。

『神権は永遠不変のものである。救い主とモーセとエリヤ（エライジャ）

は、かの山上において主の前で変貌したペテロとヤコブとヨハネに鍵の3人を授けたのであった。神権は永遠不変である。生涯の初めも、生命の終わりもなく、父も母もない。儀式に変更がなければ、神権も全く変わらない。そして福音の儀式が執り行なわれるところには、必ず神権がある……キリストは大いなる大祭司であり、アダムはその次に位する。』(Doctrines of Salvation 「救いの教義」、第2巻 p. 110)

最初に復活した人はキリストですから、だれか予言者が主の復活以前にこの世に関わる儀式を執行しようとした場合、その人は肉体を持ったままの状態だとどめておかれる必要がありました。そこで主はモーセとエリヤを生き長らえさせ、彼らが所有していた鍵をペテロとヤコブとヨハネの3人に変貌の山で授けさせたもうたのです。

そのほか、愛弟子ヨハネと3人のニーファイ人も身を変えられ、現在なお託された務めに携わっています。エノクとその民も身を変えられて天に取り上げられましたが、キリストの再臨のときにこの地上に戻ってくるようになっていきます。またほかにも、アルマのように、いまだに死を味わっていない人々がいます。

予言者ジョセフ・スミスは、身を変えられること、すなわち人がある力を受けて触知できる肉体に留めおかれることについて、次のように語っています。

「多くの人々は、身を変えられるということが直ちに神のみもとに取り上げられ、永遠の完き状態に入ることであると考えている。だが、この考えは誤っている。彼らの住む場所は月の光栄の状態であり、そのためにひとつの場所が備えられているからである。神はこれらの人々を、導きと教えを施す天使として多くの惑星に遣わすため、とどめておられる。しかし彼らはまだ、死から復活した人々の受ける完き状態に入っていない。」(Documentary History of the Church「教会歴史記録」、第4巻、p. 210)

質問

出エジプト記にはウリムとトンミムが述べられていますが、それはモーセの時代にどのような役割を果たしていたのでしょうか。それはどこから来たものですか。モーセの時代以後は、どこで、どのように使われたのでしょうか。

答え

キース・H・メサビー

ブリガム・ヤング大学
古代聖典学助教授

イスラエルのウリムとトンミムについて現在わかっているところでは、レビ神権を持つ最初の大祭司であったアロンに、神権に伴う権利として与えられたのがはじめです。(出エジプト28:31、レビ8:8) アロンは、モーセの律法をつかさどるアロン神権に関わる事柄について知ることを、ひとつの務めとしていました。(教義と聖約68:14-21、84:18-27) 王たちは、アロンを通して主から受けた勧告に従わなければなりません。そのとき、アロンの使った方法はいろいろありますが、最も重んじたものはウリムとトンミムでした。モーセが後継者としてヨシュアを召し、任命するにあたって、主は次のように指示を与えておられます。「彼(ヨシュア)は祭司エレアザルの前に立ち、エレアザルは彼のためにウリムをもって、主の前に判断を求めなければならない。ヨシュアとイスラエルの人々の全会衆とはエレアザルの言葉に従って、エレアザルの言葉に従ってはならなければならない。」(民数27:21)

この記録から、ウリムとトンミムは、神の啓示やみこころを賜わるための道具として指定されたものであることが

わかります。

これを通して、サウルは罪がだれにあるかを知ろうとしたことがあります。(サムエル上14:41) まだダビデも神の導きを求め、事態がどのように進展するか、前もって知ることができませんでした。(サムエル上23:6-13) このウリムとトンミムはエポデについていたと私たちは考えています。

ところで、前にあげた例のようにいつも答えが与えられるとは限りません。例えば、サウルが伺いをたてたとき、主は彼に語らず、またいかなる方法によっても、ウリムによってできえもそのみこころを告げられませんでした。(サムエル上28:6)

バビロン捕囚後、ユダヤ人の手にはすでにウリムとトンミムはありませんでしたが、そのときまでウリムとトンミムがどうなっていたのか、イスラエルの歴史は何も告げていません。しかしながら、義にかなった行ないをしてきた王や民は、その当時までウリムとトンミムを使って、主の勧告を求めていたことは明らかです。ウリムとトンミムがバビロンからの帰還後ユダヤ人の手に戻っていたら、失われた系図の問題は解決されていたことでしょう。そのことを考えると興味があります。というのは、この系図の問題は、神権の所有権がレビまたはアロンの子孫にのみあるということで、ユダヤ人にとってとても重大だったからです。

(エズラ2:62、63)

ユダヤ人がいつからウリムとトンミムを使用しなくなったか、正確な時はわかりません。しかし、人々はエレミヤとエゼキエルの時代に予言者を拒んでおり、主から、啓示の光をもはや受けられない時代になりつつあるという警告を下されています。この結果、彼らがウリムとトンミムを失ったのは、征服を受けたり、軽率であったりしたためではなく、その邪悪な行為によると思われれます。(ジョセフ・スミスの経験については、「教会歴史記録」、第1巻、p.21-23を参照のこと。教義と聖約3:11、10:2と対比せよ。)

質問

主は、イスラエルが約束の地で他の民と戦うのをなぜ許されたのでしょうか。

答え

キース・H・メサビー
ブリガム・ヤング大学
古代聖典学助教授

この質問に答える前に、民がこの地を所有する権利を持つのはどのような状態のときかについて、少し検討しなければなりません。

主はアブラハムにカナン之地を与えると約束されましたが、そのときにすぐ与えたのではなく、将来そのようなことがあるとの約束を下されたのでした。これには大きな意味があります。アブラハムの時代には、まだカナンの民にその地を所有する権利があったからです。しかし後にこの民は罪悪のために土地の所有権を失い、代わりにイスラエルがそれを受け継ぐ正統な継承者となるはずでした。(創世15:16、Iニーフアイ17:32-40。イテル2:8、9と対比せよ。)

カナンの民についてはあまり多くの記述がありません。けれども、モーセとヨシュアの時代までには、すでにカナン人(アモリ人)は非常に邪悪な民になっています。そのことは、主がイスラエルに、カナン人の生き方に決して倣わないよう繰り返し警告を与えられたことからわかります。性的な罪、すなわち姦淫、近親相姦、獣姦、同性愛が横行していたのでした。主はイスラエルの民に次のように命じておられます。「あなたがたはこれらのもろもろの事によって身を汚してはならない。わたしがあなたがたの前から追い払う国々の人は、これらのもろもろの事によって汚れ、その地もまた汚れている。ゆえに、わたしはその悪のためにこれ

を罰し、その地もまたその住民を吐き出すのである。……これらのもろもろの憎むべき事の一つでも行う者があれば、これを行う人は、だれでもその民のうちから断たれるであろう。」(レビ18:24:29。レビ20章と対比せよ。)

この試しの世にいる間に、その罪悪は処置なしであると烙印を押された者は、この世において主の裁きを受けました。(教義と聖約76:103、104) 主は、彼らの罪悪によって地が汚され、またこれから生まれてくる子孫がその墮落した行為に惑わされることをよしとせず、彼らをこの世から取り去られたのでした。主は、洪水や火事、飢饉、地震など、いろいろな方法でこれを行なっておられます。つるぎもお使いになりました。ジェレド人やニーフアイ人、イスラエル人、ユダヤ人、それに、レーバンなどはみな、たちまちのうちにその裁きに倒されたのでした。

イスラエルの民は、カナン人に主の裁きを下すという、喜ばしくない務めをおおせつかったのです。その民にあわれみを示さず、滅ぼしてしまうようにという命令を主は下されました。(申命7:1-3) 同時に、前の住民を追い払った後に、自分たちが正しいので主はそうさせて下さったのだなどと考えてはならない、それは彼らがそこ

に住める状態でなかったためであるとも言っておられます。次いでイスラエルの民は、前の住民がその地に住めなくなった理由をよく心に留めておくようにと命じられました。(申命9:4-6)

主は罪を見ていささかもこれを許す御方ではありません。(教義と聖約1:31) 主はいつも罪と戦っておられます。イスラエルがカナン人に戦争をしかけたのは、主がそのように命じられたからでした。(ニーフアイがレーバンを殺したのも、同じ理由によります。)これは不正に対する主の戦いでした。主に従順であるということは、主の命ずるとおりに行なうことでした。これによって、悪との壮烈な戦いで彼らがどちらの側に立っているかがわかるのです。

主がなぜ彼らにこれを求められたのか、私たちにはわかりません。彼らに故国を持たせるためであったのかもしれない。でもそれは、無償の贈り物としては与えられませんでした。あるいは、大きな罪悪の結果を彼らに知らせるためであったのかもしれない。その正しい理由は何であれ、たとえ私たちに現在その一部しか理解できなくても、主のとられた方法は必ず正義になっているのです。



笑った。しかも、聖書は文学書以上の何ものでもないというのである。私は圧倒されてしまった。

大学教授は私に比べて学識があった。一流大学から博士号を得ていた。本もたくさん読んでおり、彼らが教えるすべての事柄には確かな解答と証拠があるように思えた。私は一介の学生に過ぎないが、彼らは長年の学究生活によって研究と経験から豊富な知識を得ている教授である。「彼らから強い印象を受けた」という言葉だけでは、当時の私の心の状態を表わすには、はなはだ控え目すぎる感がある。私の信仰と信念は大きく揺れ動き、私は確固たるものを見失ってふらふらしていた。一体何を真理として受け入れたらよいのだろうか。学識あるこれらの人々の教えを受け入れるべきか。それとも、両親や日曜学校、初等協会、宗教クラス、それに神権クラスの教師たちに教えられたことと、自分の体験から学んだことを信じ続けるべきなのか。

現在、私は精密科学の分野の博士号を得ている。それは、合衆国中西部の大きな大学で取得したものである。また、化学の教授として他の大学で教鞭をとったこともある。さらに、自分自身でも研究を行ない、学生をも指導して、独自の科学の探究を行なった。そして今では、科学について、事実と理論の間には相違のあることを認めるに至っている。私はこれまでの研究と経験から、最も精密な科学の分野においてでさえ、ある種の事柄を信じるという前提が必要なことを知っている。法則といわれるものには限界があり、法則を適用するときには、必ずその限界を考慮する必要がある。私の学生時代の教授は、今日に至ってもなお立証されていない理論に基づいて話をしていたのである。彼らは、実証されていない事柄を事実として受け入れていたのだった。けれどもその頃の私は、そのことを知らなかったのである。

当時のことを思うと身震いする。彼らは自分の信じるところに極めて忠実だった。そのような人々に従い、人の立てた理論を真理として受け入れ、教会に対する私の信仰と立場を放棄してしまうことは、いともたやすいことだった。今はこのようにある程度知識や経験を持っているからいいが、これなくしてもう一度今まで歩んできた人生を繰り返してみろと言われたら、私にはその自信がない。

立派な両親がいたことを、私はとても感謝している。陽気な素晴らしい父母であった。両親は私たちを愛し、私たちも両親を愛していた。それで、私は幸せで何の心配もなく子供時代を過ごした。信仰のぐらついた大学時代には素晴らしい監督の助けを受け、また後に教会の大管長になった偉大なステファニー部長の指導にあずかった。とりわけ、父はやさしくて忍耐強く、私を励まし、大きな助けを与えて

くれた。さらに大学には、立派なすばらしい教授が何人かいて、信仰を持ち続けるように私を励ましてくれた。彼らも、私の両親や教会の指導者と同じように、幸せな人生を送っていたのだった。彼らの中のある人々は、教会の指導者として忠実であった。そのひとりはいす・キリストの使徒となり、ほかの人々も、隣人に心から奉仕をし、神への信仰をしっかりと守った立派なクリスチャンとして生活していた。

一方、神と教会の理想とを否定するよう私を誘った人々は、必ずしも幸せな生活を送ってはいなかった。ある教授たちは私の信仰心を惑わし、またある人々は痛烈に私を批判した。しかし幸いなことに、私は自分が真理だと思ったことを擁護しようと決心したのだった。ひとりの教授が私の教会の教えをひやかしたとき、私は彼に率直にこう言った。「先生、私にはあなたのおっしゃることが信じられません。試験では、あなたの望まれるような答えを書きましょう。でも、そうだからと言って、私がそう信じているわけではないことを御承知下さい。私は神が生きておられることを知っています。そして、真心から神を信じています。私はあなたの講義は受けますが、自分の信じていることは変えません。」彼は私の顔をじっと見つめ、首を横に振った。しかし私は以前に宣教師として働いたことがあり、真実であると心に強く感じた事柄を否定することはできなかった。その教授に私が信じていることを立証することはできなかった。けれども私はこのことを信じており、そのことで希望と慰めとを得ていたのだった。

母から、青は青であると学んだように、私は父と母から、神は神であることを学んだ。両親は私に信仰を教え、私は信じた、そして現在、私はイエス・キリストが神であり、神権の力が地上に回復されたことを証する特別の証人となっている。ここに至るまでの生活は苦しみが多く、遅々としたものだった。しかし、一步一步、神が現に生きておられ、現代の予言者を通じて語られるということ、信仰と祈りを通し、また研究と経験から知ることになったのである。

気持がふさいで、どちらの道に向かい、何を信じたらよいかわからなくなったときには、これらの事柄が真実であることを理解できるようになるまで、しばらく私たちの言葉に従いなさい。主を求めらば、主を見出すであろう。主を信じなさい。そうすれば、決して惑わされることはないであろう。信仰を保ち続けると、後に幸せを味わうことだろう。あなた方は、愛する神から希望の光を輝かす使命を託されて、この地上に送られてきた特別な人々である。世の人々は、この多難な時代に導きを与えてくれる指導者を必要としているのである。



でした。

「世界中の何千という人々からファンクラブの本部に『私は麻薬を止めることができません。どうしたらいいでしょうか』という問い合わせが殺到しています。子供たちは手紙を読んで、この人たちにも本当の助けが必要だと気づいたのです。」

オズモンズはテレビのコマーシャル映画を使って、麻薬の犠牲者を助ける計画を立てました。また財団の方でも麻薬の悪習に関するパンフレットを発行しました。

3番目の目標は人々の間に友好を深めていくことです。これはオズモンズにとっては、取りも直さず福音を広めることなのです。歌を歌っている子供たちは、機会をとらえては教会に対する考えを人々に知らせています。オズモンド財団も同様に隣人愛を通して少しずつ福音を広めようとしています。

福音の原則を広めることもそうですが、オズモンド一家こそ隣人愛の生きた模範と言えましょう。不幸な人々を卒先して助けようとする彼らは、多くの面において親善使節団としての役目

も十分果たしています。

カリフォルニアに住むある14歳のファンから寄せられた手紙にはこう書いてありました。「こんな素晴らしい仕事をしているんだから、オズモンズって、みんな素晴らしい人たちばかりだと思います。」

オズモンズは共に歌い、そして共に奉仕しています。このようにしてオズモンド財団は、そのモットーの中に書かれているように、いつも「必要な人々に援助の手を差し伸べる」ことにま



日々の恵み

「人と違う態度をとることは 大変でした」

ヘレナ・ハンノネン

ラッペーンランタ
フィンランド

(ブリガム・ヤング大学学生)

1960年の初夏のこと、ふたりの青年が自転車のペダルを踏んでラッペーンランタの町の坂を登り下りし、ドアをノックしたり人々に話しかけたりしていました。一見して外人であることがわかりました。子供の私たちにとってはそれがもの珍しく、モルモンについて近所の人たちが話していると、いつも耳をそばだてたものでした。

そんなある晩、未亡人の母は、兄と私に、あの宣教師たちのことをみんなが悪く言っているのは一体どうしたことかしら、そんなふうにするのはがまんがならないと話しました。そして、彼らに家へ来てもらって、話を聞くつもりよと言いました。母のクリスチャンらしい考え方が何とうれしかったことでしょう。

私たちに教えてくれた長老は、フィンランド語がほんの少ししか話せませんでした。それで時々、子供の私たちに自分の話したことがわかりますかと尋ねるのでした。でも彼の言うことは理解できました。彼らは福音をはっきりとわかりやすく説明してくれました。そして私たちはその年の8月に、そろうってバプテスマを受けました。

学校では何年もの間、末日聖徒は私

ひとりでした。みんなと違う態度をとって、級友のぶしつけな言動に甘んじることが大変でしたが、よく自分に「勇気をもって人と違うことを！」と言い聞かせました。人の冷たい仕打ちに傷つけられることも、だんだんに怖くなくなってきました。自分から孤立するのではなくて、人々と面と向かいながら、違った生き方を選ぶ、つまり、人それぞれの権利を尊重することを学んだのです。

12歳の年に、私は初めて宗教の先生と議論をしました。私がある質問に対して、末日聖徒イエス・キリスト教会で教えられている考えを述べると、先生は間違いだとおっしゃるのです。立ったまま先生の言葉を聞いていると、私は主のみたまを身近に感じて、自分の意見を裏づける聖句を聖書から引用することができました。先生は、最後にはもう何も答えられませんでした。その日から私は、主が私たちの率直で謙遜な願いを聞いて下さるという証を持つようになったのです。

私の母は体は弱くても霊的には強い人で、自分で選んだ道を歩む私を助け、厳しい、しかしやさしい手で導いてくれました。私は母に励まされたおかげで、若い人たちがよくするように、タバコの煙のこもった薄暗い喫茶店で夜の時間を過ごすこともなく、音楽や絵や本やスポーツを楽しんだのです。やがて、私は級友たちから一目置かれるようになって、みんなのリーダーになりました。

朝の礼拝の司会の番がクラスにまわってくると、全生徒の前で信仰の話をしようにと、必ず私が頼まれるのでした。自分たちの教会の讃美歌を歌う

かわりにモルモン・タバナクル聖歌隊のレコードをかけたたりして、クラスの人たちは好意を示してくれました。

7年が過ぎたとき、私は宗教の先生から、教会についてクラスで15分間話をするように言われました。その話の後の質疑応答で、2回の授業がつぶれました。その後先生が私のところに来て、私が正しいのがわかったとおっしゃるのです。先生もモルモン経を読みたいとのことでした。

私は豊かな経験に恵まれてきました。救い主はいつも若い私の飼い手、私の光、私の友でした。



先生は間違いだとおっしゃいましたが、私は主のみたまに導かれ、先生は最後にはもう何も答えられませんでした。

祖父の勇氣

アスムント・H・ヘルネス

ノルウェー、トロンハイム

私がノルウェーのナルビクにある末日聖徒イエス・キリスト教会の一員として成長することができたのは、母方の祖父のおかげです。ナルビクの港は一年中氷が張らないために、スウェーデンのラップランドから汽車で運ばれてくる良質の鉱石はみなこの港に集められ、ここから船で運び出されるようになりました。また収入の道にも事欠きませんので、たくさんの人々がナルビクへと移ってきました。そして今もなお外国からの出入りが盛んです。

私の祖父は1800年代の終りに学校の教師としてこの地へ来ましたが、歌手として教会から雇われてもいました。そして12人きょうだいの末であった母は、まだ小さい頃から、よく父のお伴をして方々行ったものでした。母が16歳のある日の夕方のこと、例によって祖父は町の集會に母を誘いました。祖父は何かとてもいわくありげでしたが、母には何も言いませんでした。そしてふたりは町で一番大きく立派な集會所の方へと歩いて行きました。そこでは有名な政治家の講演が行なわれていたのです。けれども祖父はそこに入ろうとはせず、その集會所の裏庭を抜けて見すばらしい家へ母を連れて行きました。そこではふたりのアメリカ人が笑顔で祖父たちを迎えてくれました。

祖父はもちろん福音を聞かせるために母を連れて行ったのです。福音を聞いた母は、それが本当に正しいことがわかりました。最初母は彼らのぎこちないノルウェー語を理解するのに苦労しました。けれども、幼な子には罪がないので、バプテスマを施す必要はないという説明に、母はたいそう興味を覚えました。

ふたりの長老は熱心に母に福音を説きました。そしてある日、母は祖父にバプテスマを受けたいと話しました。けれどもわずか16歳の年端も行かない

娘がバプテスマを受けてよいものかどうか、祖父は決めかねました。次の日の昼下がり、祖父は勤め先から5キロほどの道のりを家まで歩いて帰ってきました。母のバプテスマのことでとてもじっとしていられたからです。早々と帰宅した祖父を見て、母は体の具合でも悪いのではないかととても心配しました。当時は、勤務中に職場を離れることは、辞表を提出するも同然だったからです。祖父はバプテスマについて母に話をするためにわざわざ帰ってきたのでした。そして、この教会に入ると友人を失うだろう、それでもバプテスマを受ける勇氣があるのなら許す、と祖父は言いました。そう言ったとたん、祖父は肩の荷が一気に軽くなったように思いました。それから再び職場へ戻って行ったのです。

バプテスマは、人気のない海岸で行なわれることになりました。そこから一番近い家の親切な老婦人が、着換えの場を提供してくれました。でも近いと言っても、海辺から1キロ半近く離れていました。宣教師たちのすることが母によくわかりませんでした。彼らが水ついた衣服を身につけて戻ってきたときには、母はとても驚きました。それは10月で、気温は零下12度という凍りつくような寒さの中のことでした。でもありがたいことに、アメリカからはるばる流れてくる暖流のおかげで、水温は2度近くありました。

母はとてもしあわせでした。バプテスマを受けた当初は幼なじみや親戚の人から見放されてしまいましたが、時間が経つにつれて、ひとりまたひとりと戻ってきました。そして結局母はみんなから尊敬され、ほめられるようになったのです。後に母の両親もバプテスマを受けました。私は母の膝で福音を学びました。その当時ナルビク支部は最北端の支部で、教会の補助組織は十分な機能を果たしていませんでしたが、信仰篤い会員は少数ながら、定期的に会合をもち、会う人ごとに、ジョセフ・スミスが主にまみえたことを熱心に語って聞かせました。

そして今、私たちは新しい時代の夜明けをこの目で見ています。標準聖典ばかりでなく、テキストやその他の資料もノルウェー語に翻訳されています。毎年キャンプやユース・コンファレンスが開かれ、また年に数回地方部大会と地区大会が開催されます。そして最近では、スウェーデンのストックホルムで非常に盛大に地域総大会が開かれました。私がかつて支部長を務めたトロンハイムやベルゲン、ドラメン、オスロには現在美しい近代的な拝礼堂が立っています。またヨーロッパの聖徒たちのためにはふたつの神殿があります。こうして今やノルウェーにおいて、福音は急速に人々の間に広まりつつあります。



バプテスマを受けた後、母は友だちや親戚の人々から一時見放された。しかしまもなく誇りとされるようになった。

主の戒めは 祝福をもたらす

七十人最高評議員会会員
ハートマン・レクター・ジュニア

近代の予言者は、福音を分かち合う責任が主の教会の会員一人一人にあることを非常に明確にしてきた。しかしながら、私は現代の予言者が、主がかつて仰せにならなかったことを語るのは極めてまれであることを知っている。

「すべての会員は宣教師である」との命は、教義と聖約88章81節に記された主の宣言を言い換えたものである。

「見よ、われは民に証し民を警めんため汝らを遣わせり。されば、その警めを受けしことあるすべての人はその隣人を警むる責任あり。」

主のすべての戒めに関して言えることであるが、与えられた主の命令を遂行しているとき、私たちは自分の行動がどういう結果をもたらすかというはるか先のことまで完全には理解し得ないようである。しかし結果として、その行為により、私たちには常に豊かな祝福がもたらされている。なぜなら、主の本来の目的は「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」（モーセ1：39）ことだからである。当然のことながら、私たちにとって主のすべての戒めは祝福なのである。

1952年、私は朝鮮戦争での戦役を終え、カリフォルニアのサンジェゴに帰還した。その年、私は東京にある伝道本部においてバプテスマを受けていた。改宗者である私は、自分が見出したイエス・キリストの福音をだれもが捜し求めているに違いない、そう思った。私にはイエス・キリストの福音がある。私は人の気持などお構いなしに福音を与えようとしていた。

やがて、私はカリフォルニアのチュラ・ピスタにある自宅とノースアイランド間を結ぶカー・プールの一員となり、その働きに従事した。このカー・プールにはほかに4人の

海軍兵が属していたが、皆教会員ではなかった。4人のうち3人は海軍大尉（私も同じ階級であった）。あとひとりには下士官で名前をジョージ・ホワイトヘッドといった。私はこれら4人の仲間を改宗するという期待に胸ふくらませ、4人の改宗は絶対だと確信していた。運転は片道45分を要したので、その間彼らは車外に出ることもできず、じっと私の話を聞かざるを得なかった。まずこの4人を改宗し、そうしたら次に別のカー・プールに移ってそこのメンバーを改宗し、次から次へと改宗しては引越そう、私はそう決心したのである。そうすれば、すぐにも完全なワード部に必要な人数を改宗することができるのだ。

私は4人の仲間に働きかけた。しかし3人（海軍大尉）は明らかにもう一言も聞きたくないという風であった。もし彼らが聞いたとしても何と表現したらよいか、言ってみれば私の話はあひるの背中に水をかけるようなものだったのであろう。しかし、下士官のジョージ・ホワイトヘッドだけは別で、私をのけ者扱いしようとしなかった。関心があるのだ。そこで私は運転の番が自分に回ってくると、まず大尉たちを家に送り、それからジョージの家の前に車を止めて話すことにしたのだった。そのためジョージは車を降りる前に決まって1時間、私の話を聞かなければならなかった。

私はジョージに教会へ来ることを約束させようと努力し続けたが、約1ヵ月の間、彼は拒んだ。しかし、ついに私と一緒に出席することに同意すると、妻のルシールも一緒に出席しますとやってきた。私はふたりの約束に感激し、喜びで一杯だった。ジョージとルシールが初めてモルモンの日曜学校に集おうとしていた前日の、土曜日の夜のこと

を私は今でも覚えている。その日、私は教会に出かけ、教会堂の裏口のドアを洗った。それは教会堂に入るとき、いつも私が使っているドアだった。そのとき、ある青年の協力を得たが、その青年は私を軽い精神病に違いないと思っただろう。「どうして裏口のドアなんか洗っているんです？ そんなとこ磨く人なんてだれもいませんよ。」「いや、洗う必要があるから洗っているのだよ。」私は自信を持ってその青年に答えた。そして翌朝、ジョージとルシールのふたりがこのドアを通して来ることを話した。彼らが主の教会を目にし、そこに真の光を見るように、彼らにとってすべてが完全でなければならなかった。

私は、求道者を教会に最初に連れてくる宣教師以上に教会の外観や雰囲気、神に神を使う人はいないと思う。赤ん坊がみな静かであり、また美しい音楽が流れていることはいかに大切なことであろうか。また席に着いたみんなが目を覚めているならどんなに素晴らしいことであろう。しかし、これは期待し過ぎのようである。

ジョージとルシールは日曜学校にやって来た。そして、そこで私はふたりと会った。その日の日曜学校は実に素晴らしいものであった。(彼らが出席したクラスの教師は、私だった。) ジョージの顔にはありありと感動の様子が伺えた。まるで海綿のように、見るもの聞くものすべてを求めて、ひとつひとつの言葉を自分のものにしようとしていた。ところが妻のルシールはと言えば、傍らでスフィンクスのように、無表情のままじっと座っていた。彼女が私の話を聞いていたかどうかはわからない。私は心配で、クラスが終わるやすすぐ話しかけた。

昨夜きれいに磨いたあの裏口のドアを通して教会堂を出ながら、私は言った。「ルシール、今日の日曜学校どう思う？」にこりともせず彼女は答えた。「私はメソジストとして生まれました。だからメソジストとして死にたいと思います。」そのとき私は、まだリチャード・リチャーズ長老のイギリス人とスコットランド人についての話を知らなかった。それは、イギリス人が「私はイギリス人として生まれ、イギリス人として育った。だからイギリス人として死にたいのだ」と言うと、スコットランド人が「君は何の望みもないのか」と言った例の話である。

私はそのスコットランド人と同じように言い返すこともできたが、代わりにこう言った。「ルシール、私は君に約束するよ。末日聖徒となるために、君がメソジストとして学んだ真理をすべて捨てる必要は全くないのだ。私たちは他の教会や宗教関係者と論争する意志は全くない。だから他の教会に反対するチラシを書いたりしたことはないし、もちろん今後もそうするつもりはないのだよ。と言うのも、私たちの目的は人々の信仰をかき乱すことではなく、反対

に人々の信仰を築くことにあるのだから。救いは『信仰を通して得られる慈悲』によってもたらされると信ずるプロテスタントの友に、私たちはこう言いたい。『私たちもそう信じている。聖典にも「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」(ヘブル11:6)と書いてある』とね。私たちは彼らの信仰をさらに増し加えたいだけなのだ。それでプロテスタントの友人たちに言うのだよ。『一緒にイエス・キリストの完き福音を分かち合おう。私たちは君たちの持っている真理を取り上げはしない。ただ君たちにない、ある業と神権の権能とを加えるだけなのだ。』

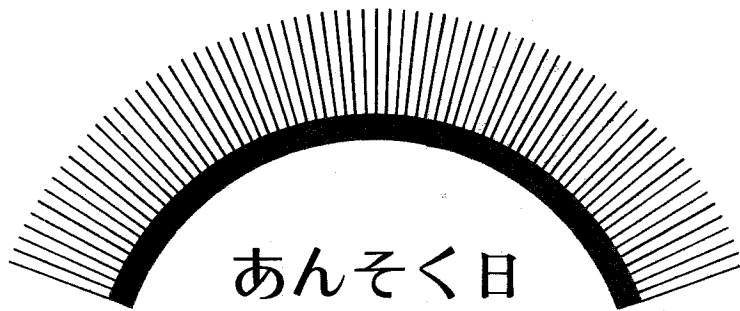
その日、私がルシールに話したことはこのような内容だった。彼女はそれ以上何も言わなかった。この出来事があったのは1952年のことである。

1958年、私はまだ海軍に属してワシントン D. C. にいたが、その年、私は航空安全対策に関する特別コースに参加するため南カリフォルニア大学に行くよう命令を受けた。そしてロサンゼルスに滞在中、私はロサンゼルス神殿で多くの時間働くことができた。祖父母や曾祖父母のために働いたことを思い出す。そのとき、私のふたりの祖母と(福音を受け入れずに死んだ)私自身の母の身代りに儀式を受けてくれた女性は、ルシール・ホワイトヘッド、そう、「私はメソジストとして生まれました。だからメソジストとして死にたいと思います」と言った彼女であった。彼女が改宗するなど全く思いも寄らぬことであった。しかし、実際はカリフォルニアのサンジェゴで日曜日の朝私に例の言葉を言ってから、ちょうど3週間目にバプテスマを受けたのであった。なぜだろうか。それは彼女が聖霊に心を動かされて、福音が真実であることを悟ったからである。

神は実に不思議なことをなされる。カー・プールの仲間に福音を分かち合ったことで、私自身の母が永遠の生命を受ける機会にあずかることができるようになるかと、どうして知り得ただろうか。

私たちには知らないことが数多くあるが、天父はすべてを御存知である。それ故、天父の命令に従うことは私たちの義務であり、命令に従っていく限り必ずや永遠にわたって祝福を受けるであろう。

※車を持っている何人かが集まってグループを作り、その中のひとりの車で他の何人かを乗せて目的地まで送迎する取決め。車の燃料節約などのために英、米、カナダで広く行なわれている習慣。



あんそく日

安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。…
…主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。

(出エジプト20：8－11)

子どものころのことで、とくに心にのこっているのは、あんそく日のことです。私の家では、日よう日はほかの日と、ぜんぜんちがっていました。月よう日から土よう日までは、人も動物も、生活のためにいっしょうけんめい体を動かして働きました。

でも、日よう日はべつでした。日よう日は安息の日であり、休息の日でした。そして、主の日でした。土よう日の夜私たちは馬を草地にはなし、しごとをぜんぶとちゅうでやめました。また土よう日は、日よう日にそなえて、家のそうじをし、ひつようなものをそろえ、身じたくする日でした。週のさいごのしごとは、……「土よう日のおふろ」でした。そのあと、私たちは、日よう日のために母がつくろって、きれいに洗たくしてくれた、ようふくをそろえました。……

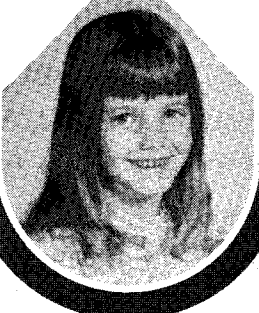
日よう日は、一番のぞましい生活をする日でした。私たちは、一番よいようふくを着、一番よい本を読み、親しい人々といっしょにすごしました。そして、仕事のことばわすれて祈りの家へ行き、心を高めて、神さまのあることを理かいしようと、どりよくしました。

スターリング・W・シル長老





小さなお友だちへ



正直でありなさい

十二使徒評議員会補助
O・レスリー・ストーン

私たちはみんな、正直になることができます。正直になると、人からしんらいされます。正直は、とてもたいせつなことなので、天のお父さまは、十戒の中にも、このことをお入れになりました。

「ぬすんではならない。」

お金や物をぬすむのだけが、ぬすみではありません。しごとをしないで給料をもらえば、会社から時間とお金をぬすんでいることになります。1日に30分、しごとをなまけると、1年では3週間以上も、なまけることになります。

正直というのは、言ったことを行なうこと、ことばと生活が、いっちしていることです。もうけたお金の10パーセントを什分の一として主におさめることも、正直のひとつです。

私は、6さいのとき、よいけいけんをしました。父が農場を売って、アイダホ州のドリッグスに雑貨屋をひらき、そこのけいえい者になったのです。そして、しばらくたったある日のこと、木の手おけにつまったキャンデーが、山ほどとどきました。ある朝、店に行ってみると、これからキャンデー・ケースにキャンデーをうつすとこらしく、手おけのふたが、みんなあいていました。

キャンディーはどれもみんなおいしそうでした。私は、ゆうわくにまけて、少しとって、ポケットに入れ

ました。でも店を出るには、父がはたらいているところを、通らなければなりません。父は、私のポケットに目をとめると、私のかたに手をおいて、うら手にあるへやにつれて行き、正直のたいせつさについて、話してくれました。

そして、父は、ポケットをからにするように言い、その店は半分しか自分のものではないこと、家族が店のものをもっていくときには、お金をはらわなければならないことを、せつめいしてくれました。もし、お金をはらわないで、もっていけば、父といっしょに働いている人のものを、ぬすんだことになるのです。

さいきん、私はストーン姉妹と、まごのアダムといっしょに、カリフォルニアへ行きました。お昼ごろ、昼食をとろうと、ある店に立ちよりました。ウエイトレスが、かんじょう書きをもってきましたが、私はそれにあまり注意しませんでした。しかし、おつりをもらったあとで、3つ注文したのに、2つ分しかせいきゅうされなかったことに、気づきました。

店をしまうときに、そのウエイトレスはお金の不足に気づくに、ちがいません。そのとき、私は、父がどのようにして正直を教えてくれたかを、ふと思い出しました。そして、これはアダムに正直を教えるのに、ちょうどよいきかいだと思いました。私たちはせきに着き、そのことをせつめいしました。私はアダム

に、こまったねと言いました。

私は言いました。このおつりを、このままもらっておいても、だれも気がつかないだろう。でも、サンドイッチをひとつ、よけいにもらっていますよって、おねえさんに言ってあげることも、できるんだ。自分のものではないお金をもらってしまえば、「ぬすんでは、ならない」という戒めをやぶることになると考えれば、どうするかを決めるのは、かんたんだ。自分が正直ではないと思いながら生活するのは、天のお父さまも、およろこびにならないし、私たちも不幸だと思うよ。

アダムと私は、カウンター上の少女のところへ行って、よけいにおつりをもらったこと、もう1ドルはらわなければいけないことを、せつめいしました。すると少女は、ぱっと赤くなって、一しゅんまごついてしまいましたが、まちがいを教えてくれたことを、私たちにかんしゃしました。私たちは、よい気持で、旅行をつづけました。きつと、天のお父さまも、私たちのした

ことを、よろこんでくださったと思います。

小さなことに正直になることを学ぶならば、それがしゅうかんになって、大きなことにぶつかっても、正直になれることでしょう。私は、これまでのあいだ、ずっと、たくさんのお金をまかせられてきました。私の正直をしんらいしてくださった人びとを、けっしてがっかりさせたりしなかったことを、かんしゃしています。もし私が不正直だったら、私には成長のきかきも、高い地位につくきかきも、来なかったでしょう。

シェイクスピアという人は、次のような、すばらしいアドバイスをしています。みなさんが、このアドバイスを、いつも心にとめておくことができるように、お祈りします。

「いちばん大事なことは、自分に正直にということだ。そうすれば、かならず、昼のあとに夜が来るように、他人にも正直にならないわけには、いかないのさ。」



こうぶくの木

おはなし：エバ・グレゴリー・ド・ピメンタ
え　　：ジェームズ・クリステンセン



じまるまで、ペチャペチャしゃべっているんじゃ。…
アドリアンは、ゆめ見ごちで、自分がどこにいる
のか、わすれていました。

「セニョーラ、ずっと家にいてくださいな。」 お母
さんはいいました。

「そうだよ、ずっといて、ね。」

でも、おばあさんは首をよこにふりました。「たび
があるでの。こうふくの木を見て、わしを思い出して
おくれ。」

つぎの日、おばあさんが行ってしまうと、アドリア
ンは、おばあさんにいわれたとおりに、たねをうえま
した。たねはめを出し、どんどん大きくなりました。
アドリアンは、1日のしごとがおわると、いつも、こ
うふくの木の下で、ふえをふきました。

なん日かたちました。……するとどうでしょう。金

色のはん点のついた、まっ赤な花が、いっぱいさいた
のです。道を行く人は、みんなこの花に目を見はりま
した。ほんとうに、ふしぎな木でした。ほかの木は、
みんなかれているのに、この木だけは、葉が青々とし
げって、花をさかせているのです。

でも、アドリアンは思いました。ぼくは、ゆうめい
になれるのかしら、お金もちになれるのかしら……。

いく日かたつと、花はかれて、たねができました。
ある日のことです。

「おい！」

アドリアンは、立ちどまって、おじぎをしました。
大じぬしの、ドン・ポーフィーリョです。

「おまえたちの、土地を買いたい。行って、おやじ
にそういえ。」

「ぼくたちの土地はやせていて、なんにもなりませ
んよ。それに、売ることなんか、できません。」 アド
リアンは、わらいながらいいました。

「おれは、その木がほしいんだ。おれに売れ。」

「それなら、たねをあげましょう。」

「おれは、木がほしいんだ。」

アドリアンは、わけがわかりませんでした。

「じゃあ、めが出たら、あげますよ。」

「ばか！」 ドン・ポーフィーリョは、アドリアン
の手から、たねをはらいおとしました。「おれは、そ
の木をおれだけのものにしたんだ。ほかのやつが、
もっているものなんぞ、いるものか。」

ドン・ポーフィーリョは、馬をかって、風のように
きえて行って、しまいました。

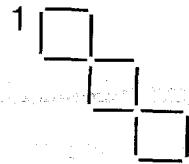
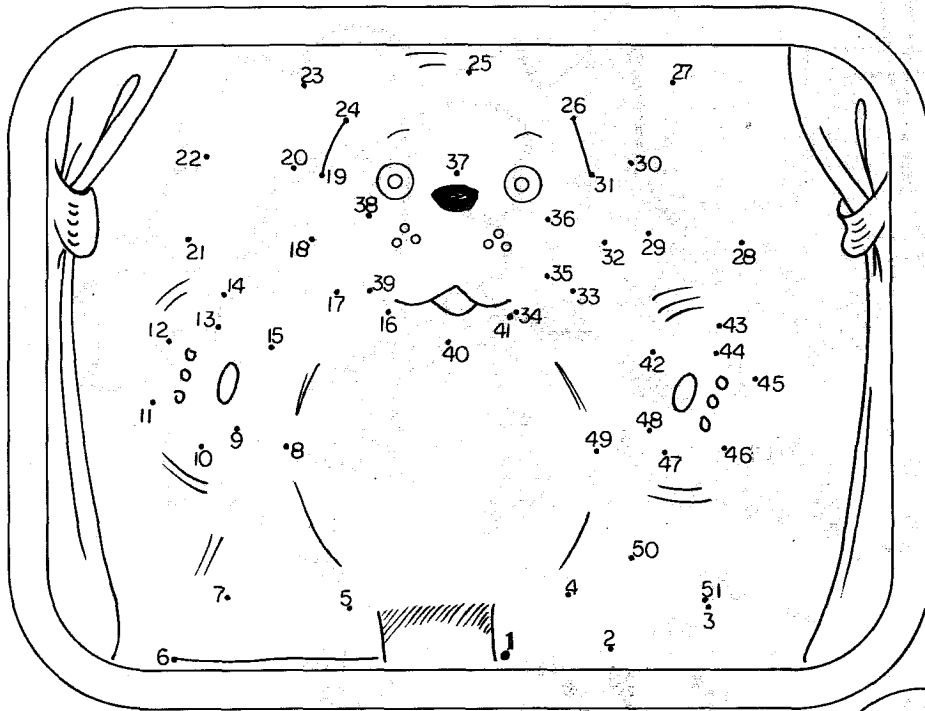
アドリアンは、思いました。お金もちなんて、こう
ふくじゃないんだな。ドン・ポーフィーリョは、お金
もちだけど、心はみすぼらしくて、わがままだ。

アドリアンは、いいことを思いつきました。

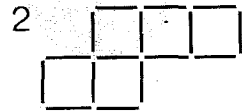
(9月号につづく)



てんをむすんでみましょう。ロバータ・L・フェアオール



12本のぼうで、正方形が3つできています。ぼうを4本うごかして、正方形を4つにしてください。



16本のぼうで、正方形が5つできています。ぼうを2本うごかして、正方形を4つにしてください。

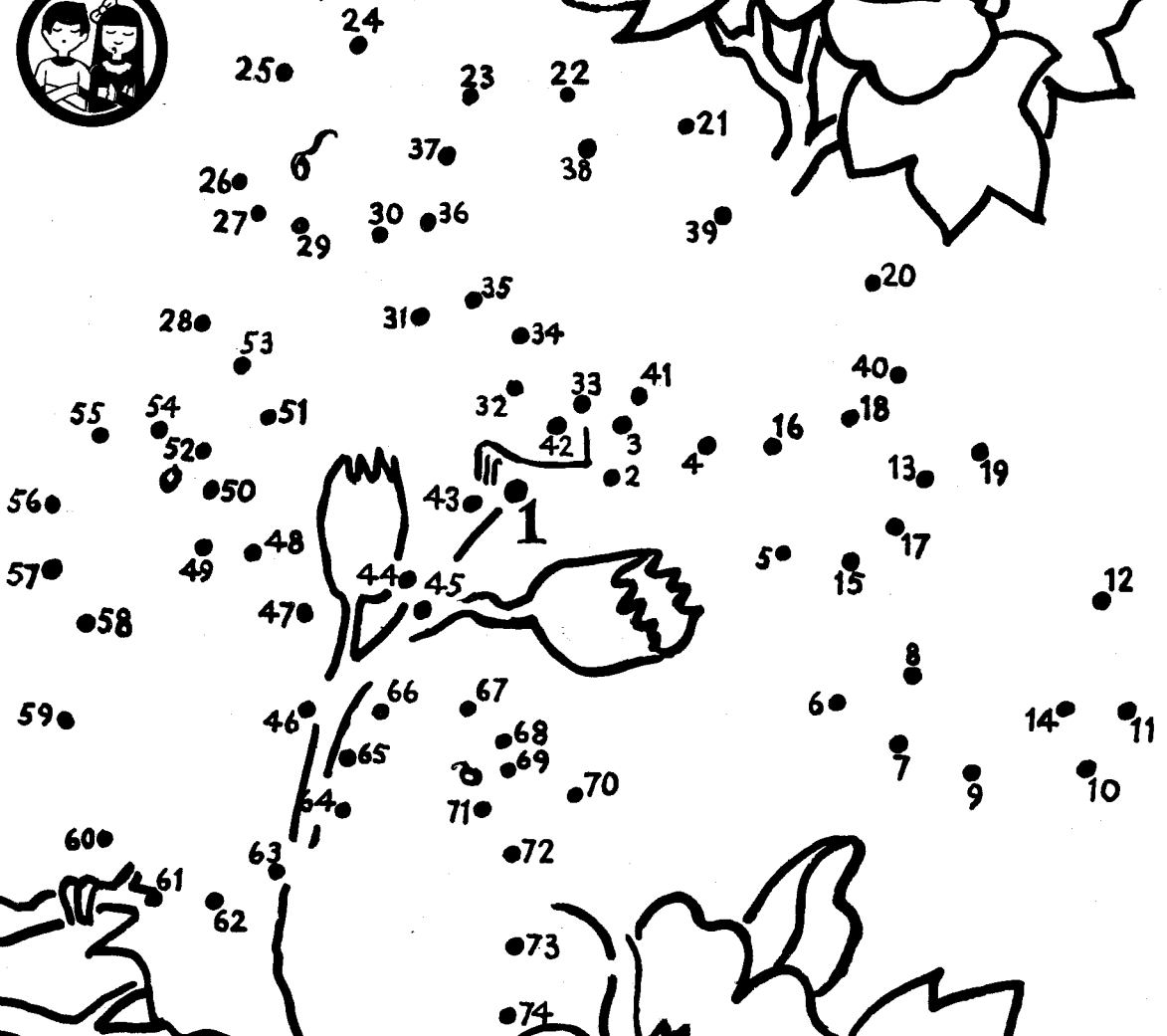
おもちゃばこ



「いやあ、こいつ動物園でねちゃってねえ。しんせつなお母さんが、おくってくれたんだ。」



1から75までのてんを
むすんでみましょう。
何があるのかな？





狼の遠吠え

ウエンデル・J・アシュトン

私は幼少の頃ロッキーの山ふところに抱かれて育ったが、私たちが一番恐れていたのはコヨーテの襲撃だった。凍てつく冬の夜など、遠吠えが聞こえてくると、柵のついたベッドにもぐりこんで頭まで毛布をかぶりながら外の様子をうかがっていたものである。

しかし、コヨーテよりももっと恐れられていたのは狼だった。狼は時代を問わず人々に嫌われてきた。古代ギリシャ、ローマの作家で、どう猛で凶悪な獣として狼を取り上げた人は60人を下らない。古代ギリシャの時代にはもうすでに狼を仕留めた者に対して報奨金が与えられている。犬の首輪は、元はと言えば狼の攻撃から身を守るためのものであった。ある詩人は狼の遠吠えを「流血の歌」と称したほどである。

先日、ニューヨークにあるアメリカ博物館が「狼の日」を宣言した。その日博物館では灰毛でジェスロという名の飼いなされた狼が、ニュースカメラマンたちを前にして羊のようにおとなしく、美しい女性たちと戯れたりポーズをとったりしていた。また博物館の講堂では、カナダと合衆国両国の動物学者によって収録された狼の鳴き声のアルバムが放送されていた。また、ニューヨーク・タイムズの著名な音楽評論家ハロルド・C・ショーンバーグによる、狼に関する論評までもあった。

カナダ政府の野生動物担当の職にあるC・H・D・クラークは、オンタリオ州スー・サン・マリーに住んでいた故ジム・カランが、オンタリオ内で狼にかまれた者全員に対して永続的な補償をすることを発表したと報告してい

る。しかしこの補償が請求されたことは一度もなかった。

狼の鳴き声に関する権威者であり、オンタリオ州のウォータールー大学生態学助教授であるジョン・B・シバークは、狼の遠吠えは決して人々を驚かせるものではないと断定している。遠吠えは群れの仲間との伝達手段であり、音色はそれぞれ異なっている。子供を失ったとき吠える遠吠えは、寂しさを表わしていることが多いとのことである。

「狼の日」に関する記事を読んでから、私は狼について少し調べてみた。狼は家族を愛する動物である。生涯の伴侶を得ると、終生その連れ合いと子供に対して誠実である。夫婦には普通3頭から8頭の子供がおり、親は子供が完全に成長するまで愛情をもって育てるが、子供が成長しても親子関係がそのまま続く場合がよく見られる。また、家族の中で1頭でもわなにかかるとすると、身内の狼はわなの所に戻るといふ習性を持っている。ある雌の狼は16日もかかって連れ合いがわなにかかった場所に引き返し、とうとう最後にはその狼自身もわなにかかってしまったという。狼は子供には忍耐強いが、逆らう子供を甘やかすはしない。狼は穏和な動物であり、仲間同士で争うことは滅多にない。

合衆国魚類および野生動物協会で44年間を過ごし、その多くを狼の追跡調査に費やしたスタンレー・ヤングは次のように書いている。

「北アメリカ全土に生息する食肉動物の中で最も頭のよい狼(犬属)に、私が関心と尊敬と、果ては愛をも抱くようになったのは50年前からである。」

(*The Last of the Loners* [ニューヨーク・マクミラン社 1970] P.305)

狼のことを詳しく知るにつれて、私は狼の遠吠えが私たちの人生と非常によく似ていることを確信するようになった。私たちはよく知らないために人や物事を恐れることが多くある。

確かに、ヤコブも長い間行方の知れなかった自分の息子に会いにエジプトの地に下って行くことを恐れた。ベエルシバで主はヤコブに言っておられる。「わたしは神、あなたの父の神である。エジプトに下るのを恐れてはならない。わたしはあそこであなたを大いなる国民にする。」(創世46:3) イサクが誕生する前にも主はアブラハムにこう言われた。「アブラハムよ恐れてはならない。わたしはあなたの盾である。」(創世15:1)

主がこの大いなる血統を私たちに与えて下さった理由のひとつは、私たちに恐れを捨てさせようとされたからであろう。「神の栄光は英智なり」(教義と聖約93:36)とあるからである。

人を恐れるのか。では、主についてもっと知ろうではないか。癌が恐ろしい。では癌についてもっと知ろうではないか。そして癌と闘おうではないか。死が恐ろしい。それでは永遠についてさらに学ぼうではないか。

モルモン経は 神のみ言葉

十二使徒評議員会会長

エズラ・タフト・ベンソン



私は今日、極めて重要なテーマに基づいて話したいと思う。私たち末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は、モルモン経を神のみ言葉であると信じている。(信仰箇条第8条) 神はそのように宣言しておられ、モルモン経の記録者たちも、モルモン経の見証者たちもそのことを宣言している。また、モルモン経を読んで、それが真実の書物であるという啓示を神から受けた人々もみなそのように宣言している。

教義と聖約第20章の中で、主は、「モルモン経を翻訳するために天より能力を彼(ジョセフ・スミス)に与えたり。この書の中には……イエス・キリストの完全なる福音を載せたり。またこの書は靈感によりて与えられ……」(教義と聖約20:8-10)と告げておられる。

予言者であり、モルモン経の記録者のひとりであったニーファイは、この書物には「キリストの言葉」が記されていると証している。(IIニーファイ33:10) また最後の記録者であるモロナイも、「これらのことが真実である」

と証を述べている。(モロナイ7:35)

この現代に、天使として神から遣わされ、三人の見証者にこれらの古代の記録を見せた人こそ、ほかならぬこのモロナイである。三人の見証者の証言もモルモン経中に記されている。「われわれは神の御声が明らかに告げただから、神の賜と能力によってこの記録が翻訳されたことも知っている。それであるから、われわれはこの経典が真理であることが確に解るのである。」

神の指示を受けてこの記録を翻訳した予言者ジョセフ・スミスも次のように証している。「モルモン経はこの地上において最も正確な書物であり、私たちの宗教のかなめ石であって、人がその教えに従って最も神に近づくことのできる書物である。」(*History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」,4:461)

モルモン経は今日の私たちのために書かれたものであり、その著者は神である。これは墮落した民の記録で、神より靈感を受けた人々が今日の私たちに恵みをもたらすために編纂したものである。当時の民がこの書物を読むことはなかった。なぜなら、これは私たちのために備えられたものだからである。

古代の予言者モルモンは、何世紀にもわたって、書き留められてきた記録をつづめ書きしてこの書物のもととなった記録を作った。そのためこの書物は彼の名にちなんでモルモン経と呼ばれている。初めから終りに至るまですべてのことを御存知である神は、今日の

私たちが必要とする事柄をモルモンに告げ、それをそのつづめ書きの中に入れてさせたもうたのであった。やがてモルモンは、最後の記録者である息子モロナイにその記録を託した。そしてモロナイは、1,500年以上も前に書きながら、今日の私たちに対して次のように述べている。「見よ、私はあなたたちが今日の前にあるかのように話しているが、本当はあなたたちはまだ生れないのである。しかし、イエス・キリストが前以てあなたたちを私に見せたもうたのであなたたちの行いが今私に解るのである。」(モルモン8:35)

モルモン経が世に現わされた目的は、表題の頁にあるように、「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させる」ことである。

モルモン経の最初の記録者である予言者ニーファイはこう語っている。「私が一心に志すところは、すべての人がアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神のところへきて救われることを、かれらに説いて信じさせることである。

それであるから、私は俗世間に喜ばれることを書かないで、神と俗世間の仲間でない者を喜ばせることを書く。

であるから、私は私の子孫に人間にとってねうちのないことでこの版をふさいではならぬと命じよう。」(Iニーファイ6:4-6)

モルモン経はふたつの方法をもって人々をキリストのもとに導いている。そのひとつは、キリストとその福音について率直に告げる方法である。モルモン経はイエス・キリストが神であり、私たちには贖い主が必要であり、また主に信頼を置くことも必要であることを証している。さらにモルモン経は、墮落と贖罪と福音の第一原則についても証している。その中には、へりくだりたる心と悔いる精神を持つことと、みたまによって生まれることの必要性も説かれている。また、私たちは正義を守って終りまで堪え忍び、聖徒として徳高い生活を送らなければならないと、モルモン経は告げている。

第2は、キリストの敵をあばく方法である。モルモン経は偽りの教義を打ち破り、争論を鎮めるものである。(II

ニーファイ3：12参照) またそれは、謙遜にキリストに従う者たちが、今日の悪魔の企てや戦略、その教えに頑強に対抗できるよう力を与えるものである。モルモン経中の背教者のタイプは、今日のそれによく似ている。私たちが誤りを見抜き、今日の誤った教育や政治、宗教、哲学等の概念といかにか戦ったらよいかその方法を知ることができるように、神は実に無限の先見の明をもってモルモン経を備えられたのである。

神は私たちに、モルモン経をいろいろに活用するよう期待しておられる。私たちは祈りの気持ちをもって丹念に読むと同時に、読みながらこの書物が神の備えられた經典か、それとも無学な若者の創作によるものか、深く思いめぐらすことが大切である。そしてこの書物に書かれていることを読み終えたら、モロナイが勧めているように、これらの言葉を試してみなければならぬ。

「またこの記録を受ける時、それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確かなものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」(モロナイ10：4) 私はモロナイの勧めに従ってみた。そのことであなた方に証したい。この書物は確かに神が備えられたものであり、まことに真実のものである。

私たちはまた、福音の教えの基としてモルモン経を使わなければならない。教義と聖約第42章で、主は次のように言っておられる。「また当教会の長老、祭司および教師たちは……完全なる福音を載せたるモルモン経とに誌されたるわが福音の原則を教うべし。」(教義と聖約42：12)

モルモン経を読み、それについて教えるときには、その聖句が「私たちの学問の利益になるように」、見立てる必要がある。(Iニーファイ19：23)

また、教会に反対する人々に対処するときにも、モルモン経を使わなければならない。父なる神とその御子イエス・キリストは、驚嘆すべき示現のう

ちに、ジョセフ・スミスのもとを訪れたもうた。その栄えある出来事の後、ジョセフ・スミスはそのことをひとりの牧師に語った。ところが驚いたことに、その牧師は、今の時代に示現だの啓示だのというようなことはない、このようなことはすべて過去のことだと言って、ジョセフ・スミスをあざけたのであった。(ジョセフ・スミス2：21参照)

この言葉は、非教会員や異論をもつ会員が教会に対して投げかける反論を象徴するものである。言い換えれば彼らは、神が予言者たちを通して今日も教会にそのみこころを示されるという事実を信じていないのである。墮胎であろうが、多妻結婚であろうが、あるいは安息日の曜日の問題であろうが、反論を招くものはすべて基本的に、ジョセフ・スミスとその後継者が実際に神から啓示を受ける予言者か否かという点に帰着する。次にモルモン経を使って、多くの反論をどのように処理すればよいか、その手順を示そう。

まず第1に、反論されている事柄について理解する。

第2に、啓示からその答えを出す。

第3に、その答えがどれほど正しいものであるかは、啓示が現代の予言者を通じて与えられるか否かにかかっていることを示す。

第4に、現代の予言者と啓示の有無は、モルモン経が真実か否かにすべてがかかっていることを説明する。

従って、反対者が解決しなければならない問題はただ一つ、モルモン経が真実か否かである。もしモルモン経が真実の書物であるならば、イエスはキリストであり、ジョセフ・スミスは予言者であり、また末日聖徒イエス・キリスト教会は真の教会であって、この教会は今日予言者が啓示を受けて導いていることになる。

私たちの主要な務めは福音を宣べ伝えることである。しかも、有効に宣べ伝えることである。私たちはすべての反論に答える義務はない。人はみな信仰をもって物事を決しなければならぬ状態にいつかは置かれる。そのとき彼は何事も自分自身で決しなければならない。ニーファイは次のように語っ

ている。「あなたたちがもしもこの言葉がキリストの言葉でないと思っても、終りの日になってキリストは能力と大きな栄光とを以てそれがキリストの言葉であることをあなたたちに認めさせたもう。そのときにあなたたちと私とはキリストの法廷で対面する。そうすれば、あなたたちは私が弱い者であるのにこれらの事を書けとキリストから言われたことを知るであろう。」(IIニーファイ33：11) 人はみな、神から責任を問われるのを知って、自らを裁くにちがいない。

モルモンは「イスラエルの家に属する……民の旗」となり、その言葉は「世界の隅々までも響きわたると主は告げておられる。」(IIニーファイ29：2) 私たち教会員は、特に宣教師は、このモルモン経を世界の隅々までも響きわたらせ、証する者とならなければならない。

モルモン経は私たちの掲げる偉大な旗である。それはジョセフ・スミスが予言者であったことを示し、キリストのみ言葉を告げるものである。そしてモルモン経のもつ大きな使命は、人々をキリストのもとに導くことである。その他の事柄はすべて第二義的なものである。「あなたはキリストについてもっと知りたいですか」というのが、モルモン経の黄金の質問である。モルモン経によって立派な求道者が見つかる。それには「俗世間に喜ばれること」は書



モルモニズムの 真髓

七十人最高評議員会会員

ハートマン・レクター・ジュニア



私たちは今、ほとんどの人が物事の確証をつかんでいない世の中に生きている。世界はひとつの理論から他の理論へと飛んで行くことを楽しんでいるようであるが、つい昨日には世界の希望であると考えられ、また思われていた理論が今日には世の害悪となることがしばしばある。妊娠中の不快感を抑えるのに使用される奇跡の薬は、奇形児を生む原因となることが認められた。「戦争を終結するための戦争」が新たな戦争を引き起こすだけに終わっている。私たちは絶えず新しいプログラムを作り出してはその中に解答を求めているようである。しかし、そこに答えを見出すことはできない。私たちは寿命を延ばし、若さを保ち、苦痛を止め、疲労を取り去り、労働を廃止するための妙薬を捜し求めているのである。

当然のことであるが、物事の真実の姿を理解しているならば、私たちが免れようとしている事柄こそ必要なものであることがわかる。苦痛は欠くことのできないものである。「彼は……さ

まぎまの苦しみによって従順を学び」とある。(ヘブル5：8) 熟睡を誘うほどよい疲労は実に心地良いものである。労働の素晴らしさはいくら強調してもし過ぎることはないだろう。困難な仕事を首尾よく成し遂げたときの満足感、私たちが現世で味わう最高のものである。自分が長年かけて努力してきたことをふり返り、今までの豊富な経験から人生の悟りが開けたことを実感として味わうとき、晩年はその人にとって、まさに豊饒の時となるであろう。

そう、私たちの社会は、幸福をつかもうとして幻想から幻想へと飛び回る。新しいプログラムにはかない望みを抱きながら。しかしどのようなものであれ、プログラム自体に魔法の力はない。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、今日多方面で大きな関心を持って見られている。「ナショナル・ジオグラフィック」(1975年4月、PP.440-73)の『聖徒たちが歌い進むとき』の記事は、この教会の様子をほぼ事実通りに伝えている。また、私たちの教会への賛辞の最たるものは、他の教会が私たちの教会のプログラムをまねているということである。家庭の夕べのプログラムは他の教会が手本としているし、同じテキストを使っている教会さえある。彼らには、同一のプログラムを用いれば同じ結果が得られると思っているふしがある。そのようには行かないだろう。末日聖徒イエス・キリスト教会の真髓はそのプログラムにあるのではなく、教義にあるからである。

私には、26年以上にわたって組合教

会の牧師をしている非常に立派な友人がいる。彼は、かつてニューヨークのロングアイランドで最も信者の多い教会を所有していた人である。彼はソルトレーク・シティーを訪問し、また自宅に末日聖徒の宣教師の訪問を受けることによって、末日聖徒についてよく知るようになった。彼は教会の素晴らしさに大いに感銘を受けたが、それは主として、そうしたプログラムを通して得られた成果を見たからである。そこで彼はこのプログラムを借用して、自分の教会に採り入れてみようと考え、実行に移してみたが、うまくゆかないことに気づいた。彼はそのことを私に次のように話してくれた。

「モルモニズムの真髓はその教義にあって方法にあるのではないことと、教会にみなぎる活気は、啓示によって授けられたイエス・キリストの回復の福音に対して、それにふさわしい生活をしようと教会員が決心するところに生まれるということに気づいたとき、少なからず動揺した。モルモニズムの実はその真髓をつかまずして得ることができないということは明らかだ。」(ジョン・F・ハイデンライヒ *It may Change Your Life* 「人生を変える教え」)

私は、今日同じことを試みている人々が、最終的には私の友人と同じ結論に到達すると確信している。家庭の夕べ、若人の活動、ヤングアダルト、建築、福祉、扶助協会、それぞれのプログラムは、他の教会に何ももたらさない。他の教会の発展に寄与することはないのである。それは驚くべき力がプログラム自体にはなく、教義にあるからである。私たちは他の教会のプログラム設定を援助することもできるが、その成功を保証することはできない。

神と私たちの関係について正しい理解と証を持つことは、末日聖徒イエス・キリスト教会のプログラムにおいて成功への土台となるものである。プログラムは、人がどこから来て、なぜここにいるのか、そして現世を終えた後どこへ行くのかを知っている人々にとってのみ、主の靈感を受けたものとなる。つまり、これらの人々は証を持っている人である。言い換えれば、神が

私たちの天父であられることを知っている人は、私たちが天父の形に造られた神の息子、娘であることを知っている。また、神が私たちの天父であられるからこそ、私たちは神を天父と呼び、さらには神に似た者となれるよう天父に助けを求めるのだということを知っている。子は親のようになることを知っているからである。

証のある人は御子イエス・キリストが私たちの長兄であることを知っている。イエスは神である。しかしながらイエスは御父ではなく、神の御子であり、全人類の救い主、贖い主である。そして神と人との仲保者なのである。これには不可思議なことや神秘的なことは全くなく、またいささかの混乱もない。

証のある人は、天父なる神が今日この地上において私たちを導きのない状態に放置しておかれないということを知っている。そして、主のみ言葉とみ旨、みこころを子供たちに啓示する生ける予言者が与えられているのである。

証のある人は「あらゆる人々主なる神すなわち世の救い主の名によりて語る」ことが、天父の望みたもうことであることを知っている。(教義と聖約 1:20) 従って、天父はこの地上において御自身に代わって働く権能を再び人間に与えたもうたのである。そして、神権と呼ばれるこの権能によって、人はバプテスマを施し、聖霊の賜を授けるために手を按ぎ、病人を癒し、悪霊を追い出し、新しい言葉を語ることができる。すなわち、イエスが言われたように、信じる者にはしるしが伴うのである。(マルコ 16:17-18参照)

また証のある人は、神権と呼ばれるこの同じ権能によって、男女は死がふたりを分かたずではなく永遠にわたって結ばれるということを知っている。なぜなら、地上でつなぐことは天においてもつながれるからである。(マタイ 16:19参照) 男も女も子供も、これらの真理をただ単に信じるのではなく聖霊によって心に深く刻み込まれるとき、主が光と知識と経験のうちに子供たちを成長させるべく、この地上において定めたもうたプログラムは、不死不滅

と永遠の生命に至る道にあって人の心に重大な影響を与えるものとなるのである。

プログラムはそれ自体では進行しない。人が動かすのである。まさにマックキー長老が語られたように、すべてのプログラムには犠牲が伴う。私たちは神の目的とされることを地上の子供たちにもたすために、特に望まないことをも永遠にわたって行なわなければならないように思われる。地上にあってどこにあって、主のプログラムを成功に導く真の鍵は「犠牲」なのである。

予言者ジョセフ・スミスは次のように語っている。「神が人間を永遠の生命を得る存在として定められたのは人間自らの犠牲によるのであり、それ以外にはない。人は、この世のものをす

べて犠牲にして初めて、自分が神の目から見て喜ばしいことを行なっていると知ることができる。

イエス・キリストについて知ることの素晴らしさに比較して、その他のすべてのもの、すなわち、名声や名誉、他人によく思われること、家、土地、兄弟姉妹、妻や子供、そして自らの命さえもどうなってもかまわないと考える人にとっては、神のみこころを行なっているとただ考えるだけでは不十分なのである。明らかな知識が必要である。さらに、これらの苦しみが終わったときに永遠の休息に入り、神の栄光にあずかるという実感を持つ必要がある。(Lectures on Faith「信仰講話」P.58)

末日望徒イエス・キリスト教会の教義は、あなた方を決して受け身の立場

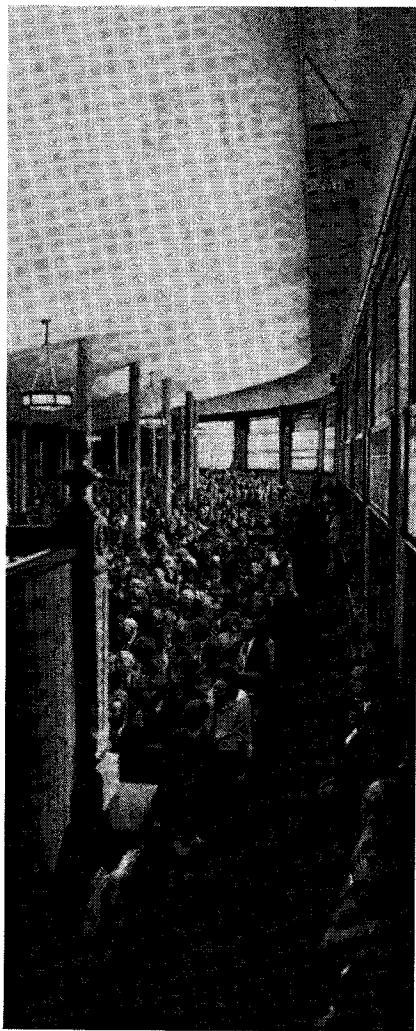


には置かない。ジョセフ・スミスは天父なる神と御子とにまみえ、言葉を交わし、全人類のために戒めを受けた。また、神から遣わされた天使モロナイはジョセフのもとを訪れ、古代の記録が刻まれた金版を授けた。その中には、南北アメリカ大陸の古代住民にイエス・キリスト御自身が語られた完全なる福音が記されている。さらに、1829年5月15日、バプテスマのヨハネがこの地上を訪れ、バプテスマを施す権能を回復し、それは神のみこころにかなうものであった。ペテロ、ヤコブ、ヨハネは地上にメルケゼデク神権を回復した。これは、あらゆる儀式を執り行ない、地上において結び固めを行なう権能である。こうして、イエス御自身が行なわれたように、地上でつなぐものは天においてもつながれる。さて、今述べたこれらすべての事柄が真実であるならば、すべての人がそれを知らなければならない。なぜなら、それらはすべて神のあらゆる子供たちへの祝福としてなされたものだからである。

末日聖徒 350万人の多くは、上に述べた主張が真実であることを証している。そのような確証があるからこそ、神の生ける予言者からの指示に従って生きようとするのである。予言者の家庭の夕べを開くようにとの勧告に従い、約50万におよぶ末日聖徒の家族は毎週子供たちを共に集め、主の祝福について語り、また神と隣人、そして家族同士の愛について話し合う。こうして家族共々、慈愛に満ちた天父から祝福を得られる生活をしようと努力するのである。

什分の一はアブラハム以前の時代から今日に至るまで、主のプログラムの中で重要な位置を占めてきた。事実、聖書にはこの永遠の原則を証明する聖句が数多く含まれている。従って、聖書を聖なる記録として受け入れているすべての教会は、この原則に従わなければならないはずである。しかしながら、末日聖徒イエス・キリスト教会を除いては、どの教会もこのことを考慮に入れていない。

なぜ1万9千名を越える若い男女が伝道の召しを受けて、家族のもとを離れ、学校生活を中断し、友人とも別れ



国々へと旅立って行くのだろうか。往々にして、彼らを取り巻く環境が敵意に満ちたものであるというのに。確かに、金銭的な報酬があるわけでもないし(彼らは自費で伝道している)、地位や権威や世の賞賛を得るためでもない。ただ、回復された真理のメッセージ、すなわちモルモニズムの真髄を天父の子供たちに分かち合おうとしているのである。私は尋ねたい。なぜ彼らはそうするのだろうか。それは、彼らが世のあらゆる問題、特に人の心が冷やかになるということに対して答えを持っていると確信しているからである。

イエスが生きておられ、天から再び語られたことは福音であり、良きおとずれである。主は再びこの地上を訪れ、主の教会を完全な状態で設立された。それはまさにペテロの予言通りである。

「だから、自分の罪をぬぐい去って

いただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである。

このイエスは、神が聖なる予言者たちの口をとおして、昔から予言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかれねばならなかった。」(使徒3:19-21)

確かに、末日聖徒イエス・キリスト教会のプログラム自体に力や強さがあるのではない。それは教義の中に見出せるのである。人は、モルモニズムの真髄をつかまずしてその実を得ることはできない。その真髄とは、証である。みたまが告げる証である。王国の活動を成功に導くのはプログラムではなく、神について、また神と自らとの関係について心の中に燃えるような確かな知識を身につけた人である。モルモニズムの強さはここにある。

私はこれらのことが真実であると証する。私はそれを知っている。神は私たちの天父であり、生きておられ、祈りを聞き、祈りに答えて下さる。また、イエスはキリストであり、生きてましまし、この教会は真実の教会であることを証する。なぜなら、偉大な予言者ジョセフ・スミスを通してこの時代に地上に主の教会を再び確立されたのは、主御自身だからであり、また今日神の生ける予言者をいただいているからである。

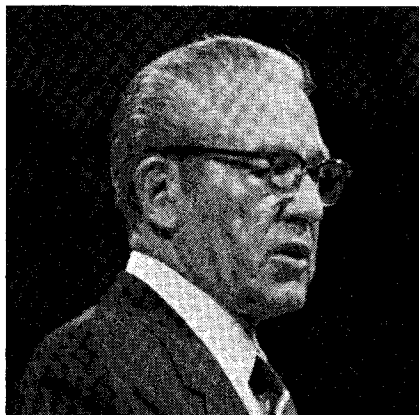
スペンサー・W・キンボールは、まさしく生ける神の予言者であり、神の王国である教会において諸々の事柄を決定し、この大会において行なったように主のみこころとみ旨を宣言する。

予言者に従うことにより、私たちは数え切れないほどの恵みを受け、教会のプログラムは進展することを証する。なぜなら、教会のプログラムは人々に天父や同胞に対する責任を理解させ、また人々は喜んでその責任を果たそうとするからである。これはイエス・キリストが運営するイエス・キリストの教会である。以上のことをイエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。

アメリカにおける キリスト

第一副管長

N・エルドン・タナー



先日、南アメリカの国々を訪れ、その地の献身的な聖徒たちの信仰と熱意に触れ、同時にモルモン経の背景となっている地にいるのだとの実感を味わって戻ってきた。そのこともあって、今私はモルモン経については是非話したいという気持ちに駆られている。この書物には、古代のアメリカ大陸の住民が織り成す歴史が記されている。

ブラジルのサンパウロとアルゼンチンのブエノスアイレスにおいて催された地域総大会で、みたまにあふれた数々の会に出席し、大勢の素晴らしい兄弟や姉妹たちと交わった。そして、彼らの純粋な信仰と、主に仕えてこの地上に主の王国を確立したいという大きな望みに、強く心を打たれた。

私たちの予言者であるキンボール大管長が、彼らの中に立ったときに彼らの示した愛、そして大管長が、取り巻く人々に祝福と助言を与えたときに彼らの目にあふれた喜びの涙、これはまことに心温まる光景であった。そのあり様を見ながら、私は、古代のニーファイ人も復活した主の訪れを受けて同

じような美しい経験をしたに違いないと思いめぐらしていた。主は確かに西半球に住む他の羊を訪れたもうたのである。そして彼らは主の羊の群れに入り、主の福音を説き踏み行なうひとつの組織を与えられたのであった。

そのことは、モルモン教の中で、ニーファイ第三書と呼ばれている箇所に記載されている。私は今日、このことについて述べたい。しかしその前に、モルモン経の存在が確かであり、必ず世に現われるということを証している予言を聖書からいくつか引用したいと思う。

次にあげるのは、旧約聖書のエゼキエル書の言葉である。「人の子よ、あなたは一本の木を取り、その上に『ユダおよびその友であるイスラエルの子孫のために』と書き、また一本の木を取って、その上に『ヨセフおよびその友であるイスラエルの全家のために』と書け。これはエフライムの木である。あなたはこれらを合わせて、一つの木となせ。これらはあなたの手で一つになる。」(エゼキエル37:16, 17)

この書の内容から、これらの木は聖書とモルモン経を指すということがわかる。また、モルモン経がどのようにして世に現われたか知ると、黙示者ヨハネの語った言葉の意味がよく理解できる。すなわち、ひとり天使が実際に天より下り、モルモン経の翻訳前の記録をジョセフ・スミスに渡したのであった。黙示録には次のように記されている。

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、

民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め。」(黙示14:6, 7)

神は世の初めからすべての神の子らに関心を示してこられたが、今日でも同じように私たちに関心を寄せておられる。これを確証する聖句はたくさんある。従って私たちは、この末の日にも神は予言者を通して絶えず啓示を下し、私たちに導かれることを信じている。予言者アモスはこう言っている。

「まことに主なる神は、そのしもべである予言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされぬ。」(アモス3:7)

救い主は次のように語っておられる。

「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。」(ヨハネ10:16)

このことから、救い主が十字架の刑を受けて復活した後、予言されていたしるしと驚異のうちに西半球の民を訪れたもうたわけは明らかである。それは、主はこの世において共に暮らした民に、主の福音を学び、それに従って生活する機会と特権を与えられたが、この西半球の民にも同じ機会と特権を与えるためであった。

この訪れを記したニーファイ第三書の記録以上に、神と人との交わりを美しくかつ詳しく記した記録は、聖典中のどこを捜しても見出せないと思う。私はこの記録を読むようにすべての人に勧めたい。そこには警告の言葉と、美しい教え以外の何もも見出し得ない。これらの警告と教えを受け入れ、これに従って生活するならば、世の人々や、このような生き方を求めている人に、平安と幸福をもたらす上で、これほど大いなる働きをするものはほかにないであろう。また、聖書では答えることのできない数多くの疑問に対しても、適確な解答を得ることができる。

ニーファイ第三書は、新約聖書の4つの福音書よりも詳細に、多くの知識

を提供してくれる。さらにそこには、主の教義と教えが保たれており、主の慈悲深い業が記録されている。この理由から、多くの人々はニーファイ第三書を「第5の福音書」と呼んでいる。

このニーファイ第三書は、キリストの誕生を告げる予言の記事で始まる。しかし、世の始めからその時に至るまで、また今日においても見られるように、その予言をあざけり、予言者の言葉が成就する時はすでに過ぎたと言う者たちが多かった。そして彼らはある一日を定めて、その日までに予言されたしるしが現われなければ、信じる者たちをすべて殺すことにしたのである。そのことでニーファイは「熱心に主に祈りを捧げた。」(Ⅲニーファイ1:12) それに対して主はニーファイのもとを訪れ聖なる予言者たちの告げることが成就する時は、間近であると答えられた。こうしてすべてのしるしが現われ、新しい星が空に出たので、予言を信じなかった者たちは「地に倒れて死んだようになった。」(Ⅲニーファイ1:16) ここに私たちの学ぶべき第一の教訓がある。つまり神の予言者の言葉は必ず成就するのである。

しかし、民は間もなく、自分たちの経験したしるしと驚異をすべて忘れてしまい、悪事にふけるようになった。そして戦いがあり、ガデアントン強盗団がおこり、国が荒廃し始めた。そのような中で、正義を守って主を呼び求めたニーファイ人たちは彼らの敵を打ち負かすことができた。そして自分たちの救われたことについて神を賛美したのである。

記録にあるように、彼らは「かれらの罪や憎むべき行いやみだらな行いをことごとく捨てて夜昼熱心に神に仕えた。」(Ⅲニーファイ5:3) こうして彼らは栄えた。

「多くの都市が新しく建てられ、多くの古い都市が修理され、都市から都市へ、地方から地方へ、また所から所へ行く多くの街道が開通された。」(Ⅲニーファイ6:7, 8)

このように、モルモン経の記録は、この地方に古代文明が栄えていたことを証拠立てている。学問のない一介の若者が神の賜と力によって翻訳した

モルモン経は、現在科学が証明しつつある事柄を、非常に詳細かつ生き生きと描写しているのである。

まことにこれは、この末の日に世に出されるよう神のみ手によって守られてきた真実の記録である。

話をもとに戻そう。今日の世でもそうであるが、民は繁栄すると高慢になり、論争を始めた。そしてある者たちは故意に神に逆らった。この結果、わずか6年の間に民の大部分は邪悪に陥ってしまった。そこでニーファイは伝道を始め、勇敢に悔改めを説いた。

悔改めを説くこと、これは神の予言者の務めである。たとえ受け入れられなくても、行なわなければならない義務である。民はニーファイに対して怒ったが、彼は威勢と大きな権能とをもって教えと導きを与えた。

「ニーファイがその主イエス・キリストを信ずる信仰は非常に深くまた固かったから、天使たちが毎日ニーファイに導きと恵みとを与え……

ニーファイは、イエスの御名によって悪鬼と汚れた霊とを追い出し、その上民のために石で打ち殺された自分の兄弟を蘇生させた。」(Ⅲニーファイ7:18, 19)

その後再び、予言者たちの予言したように、キリストが十字架にかかりたもうたことのしるしが現われ、嵐や地震、暗黒、雷、火がその出来事の証として起こった。多くの都市が海中に没し、山々が隆起し、地の全面にわたってその様相が変わった。これは3日間続き、「ある所では民が『この大きな恐ろしい時が来ない前に悔い改めておけばよかったものを。悔い改めておいたならば、わが兄弟たちは命を助けられて大きな都ゼラヘムラで焼く死ななかつたものを』と泣き叫ぶのが聞えた。

またほかの所では民が『この大きな恐ろしい時が来ない前に、悔改めをして予言者らを殺さず、石でこれを撃たず、また追い出さなければよかったものを。このようなことをしなかったならば、われらの母や美しい娘や息子たちは命を助けられて、大きな都モロナイハ市で生き埋めにされることはなかつたものを』と泣き叫んでひどく悲しむ声が聞えた。このように、民の歎き

とうめきとはまことに甚しくまた恐ろしいものであった。」(Ⅲニーファイ8:24, 25)

明らかにこれもひとつの教訓である。過去の歴史を見ると、予言者を拒み、邪悪な行ないを悔い改めようとしなかった者たちは惨禍を被り、予言者の警告を心に留めなかったことを嘆き悲しみ、後悔している。御存知のように、主の使徒たちも、神の王国を築き、民を悔い改めさせて幸せな生活に入らせようと努めたというだけで迫害を受け、石で撃たれたのである。

今日の世の人々は、神の予言者の言葉を拒んでいる。人々は戦争を繰り返しているが、そのことで嘆き悲しむ出来事が地の面を覆っているとは言えないだろうか。また、若人が義の道を求めて、アルコールやタバコ、幻覚剤、その他禁じられたものに手を出した結果苦しみに陥り、悲劇を被っていることを、また彼らがいつも気まぐれな行為に走っていることを、大勢の人々が嘆いてはいないだろうか。現在の社会に存在している不法行為を、いかに多くの人々が悲しんでいることだろう。私たちは、姿を消した古代文明のようにならないために、過去の歴史から得た教訓を心に留める必要がある。

キリストはこのことを古代のニーファイ人に告げられ、その声は「地のすべての人々に」聞こえた。(Ⅲニーファイ9:1) 主は彼らに民の罪悪と憎むべき行為を思い起こさせ、また住民の邪悪のために滅びた数多くの都市のことについて語られた。そして次のように言われた。

「さてこれらの亡びたる者よりも義しきが故に命を助けられたるすべての者どもよ。われが汝らを医すを得るために、汝らは今われに立ち帰りて罪を悔いまた心を改めざるか。

まことにわれ汝らに告げん。もしわれに来れば永遠の生命を得ん。見よ、われは憐み深き手を汝らに向けて伸べたれば、すべてわれに来る者はわれこれを迎える故に幸福なり。」(Ⅲニーファイ9:13, 14)

主のみ名によって語る予言者たちを通して、主は今日の人々も同じように招いておられる。この福音は、主がエ